

水の文化

「水の文化」

平成11年10月

第3号



水の文化

平成11年10月 第3号

報告 『水にかかわる生活意識調査』



- 1 あなたの家庭の水道水を10点満点で採点すると？
- 2 現在の水道水について不満・不安を感じている点は？
- 3 水に関して日頃不安に感じていることは？
- 4 水道水 VS 浄水器 あなたが日常使っている水は？
- 5 節水を実行していますか？ その具体的な方法とは？
- 6 あなたが家庭で行っている水質保全への配慮は？
- 7 きれいで安全な水を残すために必要なことは？
- 8 水に関わることで知っていること、経験のあることは？
- 9 あなたが一番おいしいと思う水は？
- 10 水と関わりの深い日本文化といえは？
- 11 日本でもっとも自然が残っていると思う川は？
- 12 水辺での楽しみ方は…？



- 13 もっともおいしい水が飲めると思う都道府県と国は？
 - 14 水の供給地（都道府県）として思いつくのは？
 - 15 「水の都」のイメージにもっとも近い都市は？
- インタビュー 陣内秀信「世界水の都」
- インタビュー 早川 光「湧き水の向こうに見えるもの」
- インタビュー 陣内秀信「世界水の都」

富山和子「水の文化」とは何か 第3回

『有明海と《佐賀》』

アオ（淡水）の世界』

「水の文化とは」と問われるとき、
まず心に浮かぶのが、アオ（淡水）の文化です。
アオとは、
上げ潮に乗って海からやってくる川の水のことですが、
そんな水を使って、太古の昔から最近まで、
独特の世界を築き上げてきたのが、
有明海沿岸の人たちなのです。



『水にかかわる生活意識調査』

ミツカングループでは'95年以降、『水にかかわる生活意識調査』を実施してまいりました。

本年で5回目を迎えるもので、『99年度の調査結果は7月に新聞等で公表されました。

今回の特集では、この最新の調査結果を中心に、

「都市生活者をもつ水へのイメージとくらしの関係」について追ってみたいと思います。

調査概要

- ・ 調査対象数 6000票
- ・ 有効回答数 490票 (有効回収率: 81.6%)
- ・ 調査対象者 東京圏(東京都、千葉県、埼玉県、神奈川県)、大阪圏(大阪府、兵庫県、京都府)、中京圏(愛知県、三重県、岐阜県)
- ・ 調査方法 ファックスによる調査票の送付および回収
- ・ 調査期間 1999年6月4日～6月9日

《有効回答内訳表》

(単位:人)

	東京圏		中京圏		大阪圏		全体		小計
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	
20代	27	30	16	16	11	13	54	59	113
30代	29	33	14	15	16	18	59	66	125
40代	34	25	16	16	15	15	65	56	121
50代以上	39	27	16	13	19	17	74	57	131
合計	129	115	62	60	61	63	252	238	490
	244人		122人		124人		490人		

東京圏：大阪圏：中京圏の回答者数比率は、ほぼ2：1：1の割合となっています。
過去4年間も、毎年同様の規模で調査を実施してきました。

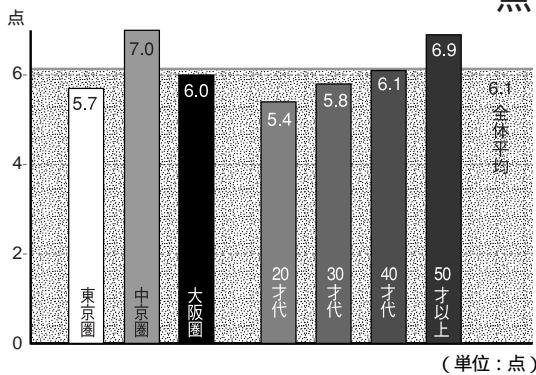
水道水

Q1 あなたの家庭の水道水を10点満点で採点すると？

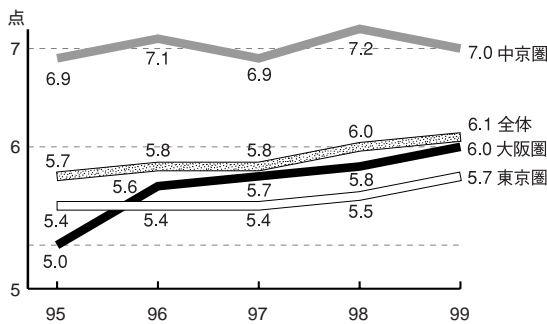
全体平均では過去最高の6.1点
低年齢ほど厳しい採点で20歳台では5.4点
中京圏と東京圏では大きな差

くらしの基本を支える水道水に対して、10点満点評価を行ってまいりました。全体を平均すると6.1点(A図)、この点数はおおよそこの5年間、大きな変動はありません(B図)。ただ、C図を見ると、東京圏・大阪圏居住者がほぼ同様に左右対称に分布しているのに対し、中京圏居住者は8点をつける人がもっとも多く、右側に寄った分布となっています。この違いがどこからくるのか、興味深い点です。

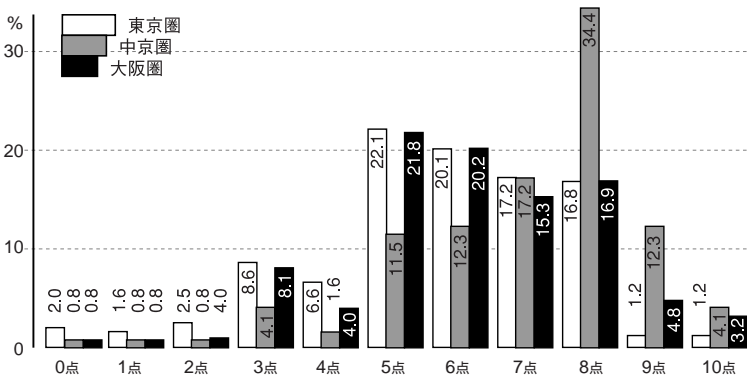
A. 《水道水の10点評価 - 99年》



B. 《10点評価 - この5年間の推移》 (単位:点)

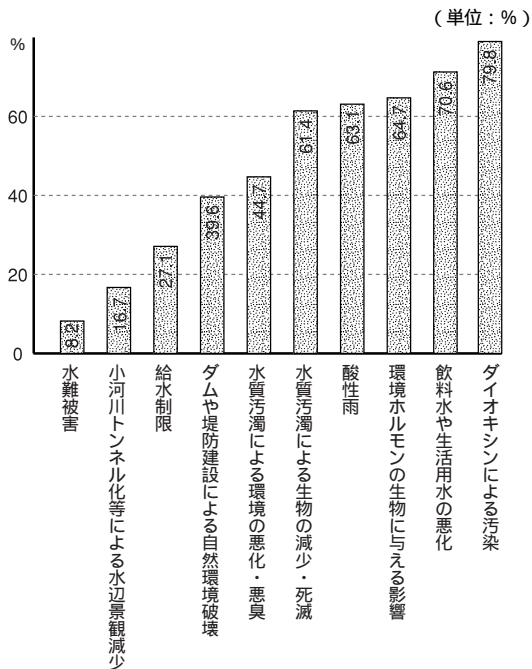


C. 《居住地域別に見た評価の違い - 99年》 (単位:%)



水に関して日頃不安を感じている事柄について、10の選択肢から複数選択していただいた結果です（A・B図）。中でも目を引くのは「ダイオキシンによる汚染」に、全体で5人に4人が不安を感じているという点です。また、昨年「環境ホルモンへの生物への影響」を挙げた方は東京圏では61.4%でしたが、今年は68.0%と約7ポイント上がっており、マスコミ報道の影響も予想される結果となっています。

A. 《日頃感じている水への不安 - 99年》



B. 《A図のワースト5を居住者の地域別・性別から見た構成比率》

	東京圏	中京圏	大阪圏	男性	女性	全体
ダイオキシンによる汚染	81.6%	79.5%	76.6%	73.0%	87.0%	79.8%
飲料水や生活用水の悪化	75.0%	63.9%	68.5%	69.8%	71.4%	70.6%
環境ホルモンの生物への影響	68.0%	60.7%	62.1%	60.3%	69.3%	64.7%
酸性雨	62.7%	63.9%	62.9%	58.7%	67.6%	63.1%
水質汚濁による生物の減少・死滅	66.8%	54.1%	58.1%	58.7%	64.3%	61.4%

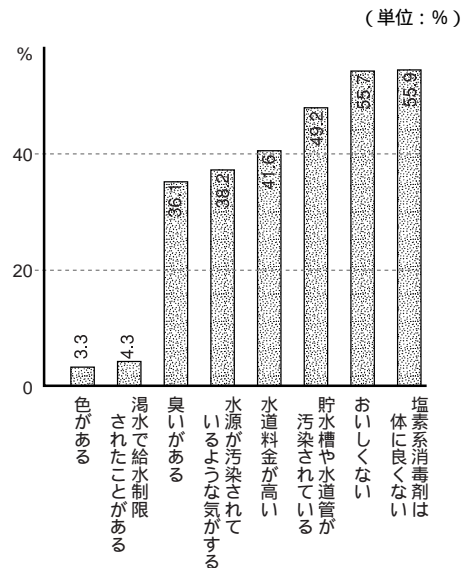


8割近くが『ダイオキシンの汚染が不安』と回答

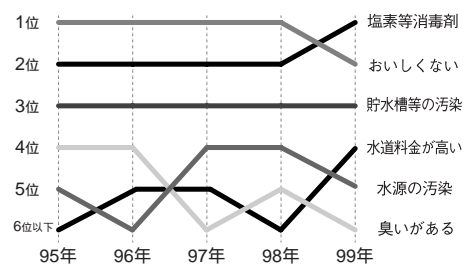
Q3 水に関して日頃不安に感じている点は?

現在の水道水について、不満・不安を感じている点を8つの選択肢の中から複数選択していただいた結果です。しかし、A~C図を見ても、おおよその傾向はほとんど変わっていません。世代別に見ても、こうした不安をほぼ均等に感じているようです。

A. 《水道水への不満・不安 - 99年》



B. 《A図のワースト5 - この5年間の推移》



C. 《東京圏・中京圏・大阪圏居住者が選ぶワースト5 - 99年》

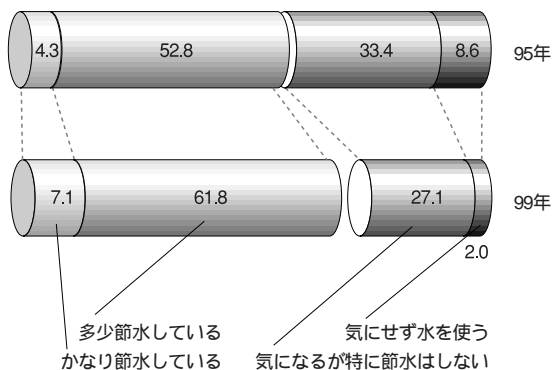
	東京圏	中京圏	大阪圏	全体
1	おいしくない 63.5%	塩素系消毒剤 45.1%	おいしくない 62.1%	塩素系消毒剤 55.9%
2	塩素系消毒剤 63.1%	貯水槽等の汚染 43.4%	塩素系消毒剤 52.4%	おいしくない 55.7%
3	貯水槽等の汚染 52.5%	水道料金が安い 36.9%	貯水槽等の汚染 48.4%	貯水槽等の汚染 49.2%
4	水道料金が安い 42.6%	水源の汚染 34.4%	水道料金が安い 44.4%	水道料金が安い 41.6%
5	水源の汚染 40.2%	おいしくない 33.6%	臭いがある 40.3%	水源の汚染 38.2%

「塩素系消毒剤」「おいしくない」「貯水槽や水道管の汚染」がトップ3

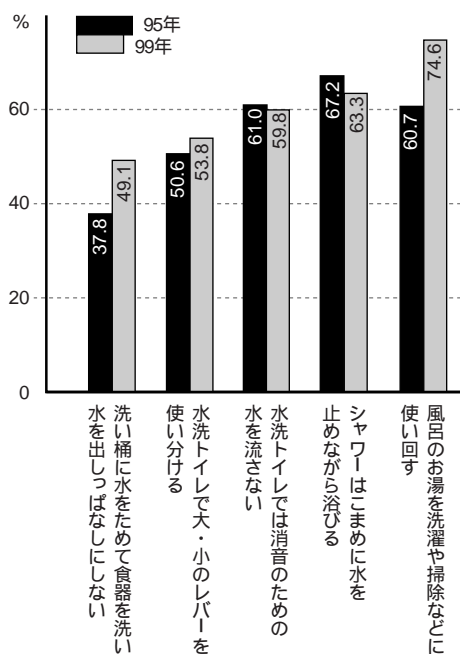
Q2 現在の水道水について不満・不安を感じている点は?

家庭での節水実行度（A図）ならびに「かなり節水している」「多少節水している」と回答した方が行っている具体的な節水方法（B図）についてそれぞれ複数選択いただいたものを、'99年と'95年と比較したものです。家庭での節水習慣も確実に根付いているようです。'95年には「気にせず水を使う」と答えた方が8.6%もいたのに対し、今年は2.0%にまで下がりました。気になるのが、具体的な節水方法です。B図を見ると、「風呂のお湯を使い回す」「洗い桶に水をためて食器を洗う」が確実に増えていますが、「水洗トイレで消音のための水を流さない」が61.8%から59.8%、「シャワーはこまめに水を止めながら浴びる」が67.2%から63.2%へと減っています。洗濯や洗い物という家事面での節水方法は根付いているようですが、トイレやシャワーの水に対する節水意識が、脇に追いやられる傾向があるように思われます。

A. 《家庭での節水実行度》（単位：％）



B. 《具体的な節水方法》（単位：％）



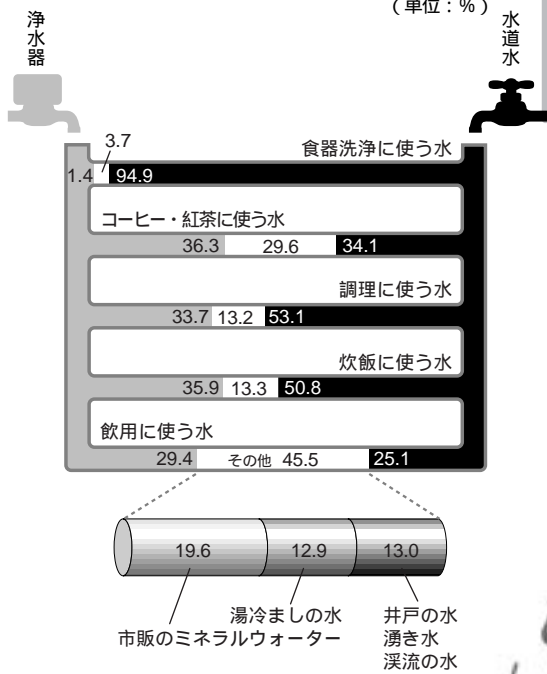
約7割が節水派 「風呂の湯の使い回し」は7割以上の方が実行

Q5 節水を実行していますか？ その具体的な方法とは？

水を飲む時、ご飯を炊くとき...など5つの用途で使う水を、水道水、湯冷ましの水、井戸の水、湧き水、溪流の水、浄水器を通った水、市販のミネラルウォーターの中から各々1つずつ選んでもらった結果です。図は、その結果を“水道水”と“浄水器を通った水”“その他”に分けて示したものです。飲料水への不安のためか、かなりの程度の方が浄水器を使っていることが分かります。さらに、炊飯に浄水器を使う方が、'95年では28.3%にすぎなかったのに対し、今年は35.9%となっています。また、「飲用に使う水」として「その他」の内訳は、「市販のミネラルウォーター」が19.6%、「湯冷ましの水」が12.9%と続いています。飲料水の浄化に費用をかける方が少しずつ増えてきているようです。

《用途別の“水道水”vs“浄水器” - '99年》

(単位：％)



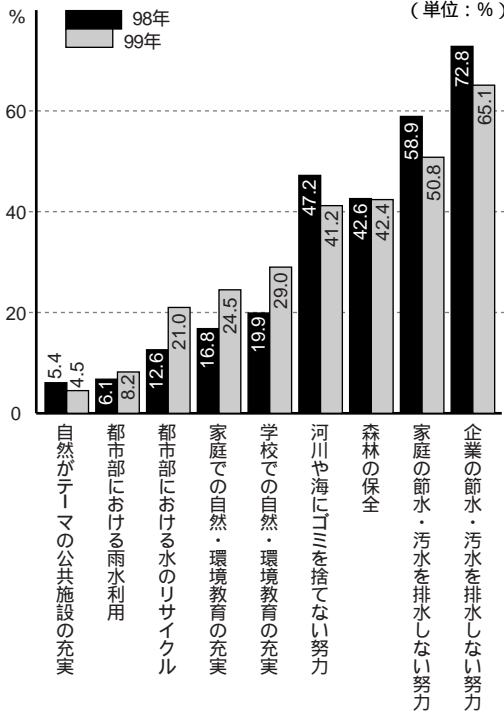
Q4 水道水 VS 浄水器 あなたが日常使っている水は？

ご飯は水道水で炊くが約5割 飲用には浄水器を通った水を使うは34%

将来にわたって、きれいで安全な水を残すことに必要なことは何でしょうか。図は11の選択肢の中から複数選択していただいた結果です。

「企業や家庭の節水・汚水を排水しない」「森林の保全」「河川や海にゴミを捨てない」- これらはここ数年大きな順位変動はありません。ただ、99年は「学校や家庭での自然・環境教育の充実」や「都市部における水のリサイクル」が、昨年に比べ大幅に伸びていることが目を引きます。

《きれいで安全な水を残すために必要なこと》
(単位：%)



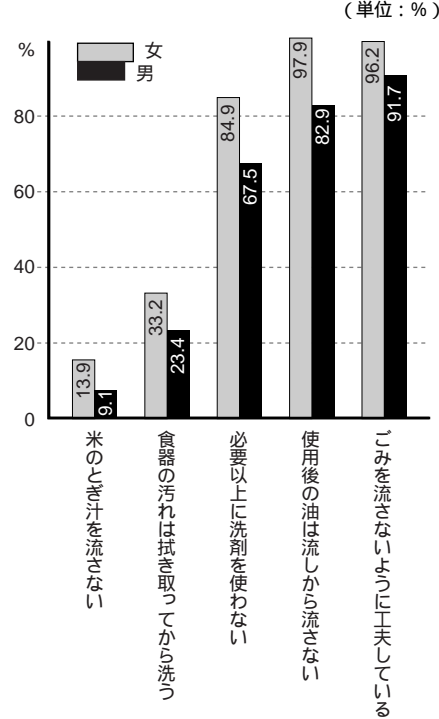
必要なことのトップは「企業の努力」

Q7 きれいで安全な水を残すために必要なことは？

家庭で行っている具体的な水質保全への配慮を、5つの選択肢の中から複数選択していただいた結果です。やはり男女の意識の差が表れる結果となっています。どの方法もこの5年間、ほぼ同様の比率で推移しています。

意外と知られていないのが「米のとぎ汁を流さない」。環境に負荷をかける一つの原因となっています。

《家庭で行っている水質保全への配慮 - 99年》
(単位：%)



「ゴミを流さない」「油を流してから流さない」は9割以上の実施率
女性の方が高い身近な環境保全意識

Q6 あなたが家庭で行っている水質保全への配慮は？



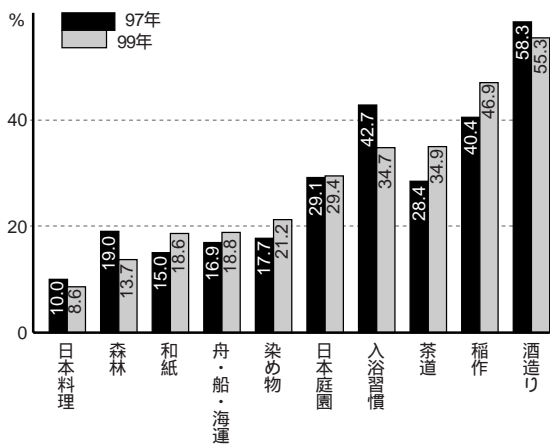
「水と関わりの深い日本文化は？」という問いに、次の19の選択肢の中から3つを選んで頂いた結果です。

茶道、華道、書道、日本庭園、日本料理、木像建築、森林、歌舞伎、能・狂言などの伝統芸能、染め物、宗教、園芸、舟・船・海運、稲作、酒造り、醤油造り、酢造り、和紙(製紙技術)、入浴習慣、祭り

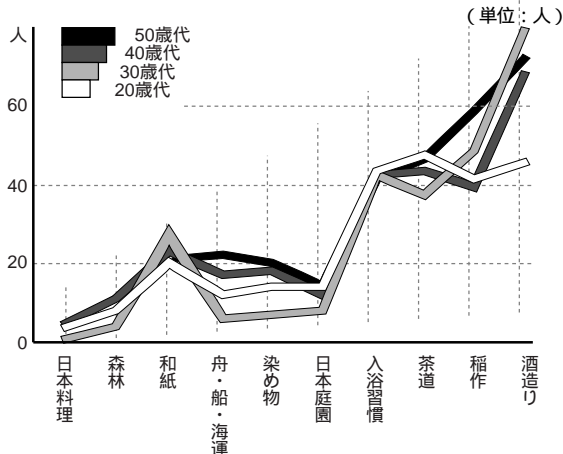
水から思い浮かべる日本文化というと、「酒造り」や「稲作」ということなのでしょう。A図を見ると、'97年には42.7%と「酒造り」に次いで2位を占めていた「入浴習慣」が、今年では大幅ダウンしているのが気になります。

ではこの結果を世代層別に分けてみると、どのような結果がでるでしょうか(B図) まず目を引くのが、20歳代の意識です。20歳代が最も「水に係りのある日本文化」と感じているのは「茶道」であり、「酒造り」や「稲作」、「入浴習慣」は2番目でほぼ並んでいます。「酒造り」を選ぶ方は、年齢層が高くなるほど多くなると私たちは思いがちですが、実際には30歳代の方が一番多いという結果が出ています。また、「酒造り」以外の項目については、おおむね各世代が同調しているようです。とは言っても、詳しくみると、20歳代が他の世代とは若干異なる動きを示しているように思われます。

A. 《水と関わりの深いと思う日本文化》(単位: %)



B. 《世代によって異なる水と日本文化のイメージ - 99年》(単位: 人)



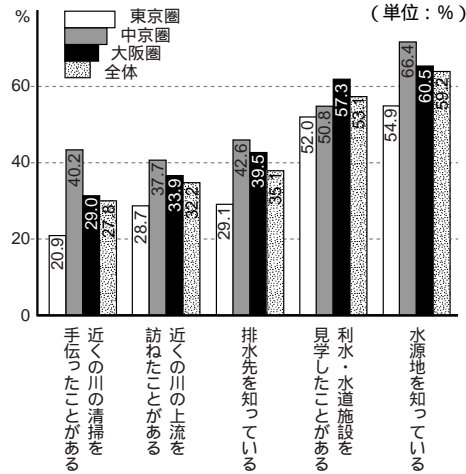
酒造り、稲作、茶道...

Q10 水と関わりの深い日本文化といえは?

水に関わることで知っている・経験のあることについて、複数選択していただいた結果です。都市居住者にはなかなか、「蛇口と排水口の向こう側」のことが分からないものです。そこで水に関わることで知っていることについて調べてみると、水源地や利水・水道施設に比べ、排水先を知らない方の割合の多さが目を引きます。

また、総じて中京圏の認知率・経験率が高いようです。水道水への評価での東京圏・大阪圏との際だった違いなど、中京圏の生活者と水との関わりには、他地域と異なる特徴があるように感じられます。

《東京圏・中京圏・大阪圏 各居住者の「知っていること、経験のあること」 - 99年》(単位: %)



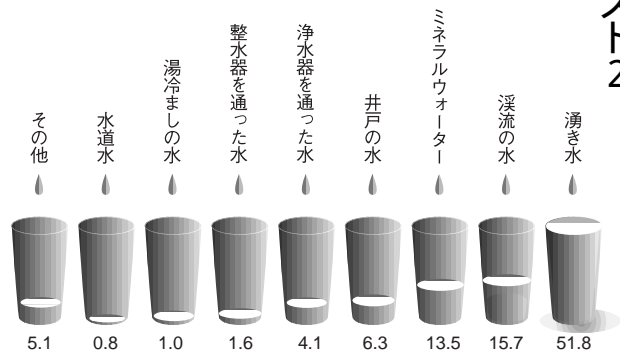
「使った水の排水先を知っている」は35%
「川の清掃を手伝ったことがある」は中京圏で高く40%

Q8 水に関わることで知っていること、経験のあることとは?

「一番おいしいと思う水」について、9つの選択肢の中から1つだけ選んでいただいた結果です。「湧き水」が2位以下を引き離して半数以上を占めています。2位の「溪流の水」とも合わせると67.4%となり、自然の水への評価の高さが目を引きます。

湧き水、溪流の水がベスト2
やはり自然の水が一番

Q9 あなたが一番おいしいと思う水は?



《一番おいしい水 - 99年》(単位: %)

Q11 日本でもっとも自然が残っていると思う川は？
『四万十川』が48%で断然トップ

《もっとも自然が残っていると思う川
ベスト5 - 過去3年間の推移》

(単位：%)

	1999年	1998年	1997年
1	四万十川 48.6%	四万十川 48.5%	四万十川 42.1%
2	長良川 6.1%	長良川 6.3%	長良川 5.3%
3	信濃川 4.3%	信濃川 5.0%	石狩川 4.5%
4	石狩川 4.1%	最上川 4.4%	信濃川 4.3%
5	最上川 3.5%	木曾川 3.8%	最上川 4.1%

この調査結果を見て

高知県文化環境部 四万十川対策室

室長 市原 利行 氏

「日本でもっとも自然が残っていると思う川は？」で、四万十川がトップになっただけでなく、昨年と比べて今年もトップに選ばれた。さらに、今年の調査でも三年連続トップで、約半数の方が四万十川をあげていただいたということ、非常にうれしく思っています。

四万十川が全国に紹介され表舞台に出たのは、一九八三年のNHK特集の中で「最後の清流」と報道されたことが最初でしたが、一六年経た今でも全国の方々に

根強い人気が続いていること改めて認識しました。

四万十川は清流の代名詞となっていますが、水質そのものは普通程度です。何が人気を高めているかと言えば、「川本来の姿をとどめ、そこに生活が営まれている」ということではないかと思えます。四万十川程度の川は一九六〇年代頃には全国どこにもあった川です。しかし、全国の川がダム建設やコンクリート護岸で固められて来た時期に、開発の波に洗われなかったことが相対的に評価を高めている結果ではないかと思えます。

橋本知事は、「人々の息づかいが聞こえる川」といい、全国から訪れた方の中には、

「川のおいがる」と言ってくれます。

四万十川が

他の河川と異なる点

四万十川の特徴を一言で表すと、「中山間部を流れているのに、流れが非常に緩やかであること」です。日本の河川のほとんどは、二〇〇〇〜三〇〇〇メートル級の山々から発し、直線的に海に流れています。四万十川は二〇〇メートル程度の高さに源流点を持ち、大蛇行を繰り返しながら海に注いでいます。河川勾配は、中・下流域でも一キロ流れても、一〜二メートルの高さが下らず、淵では湖のような場所も随所に見られます。

下流の約五〇キロ区間を中心にゆるいS状の蛇行を繰り返す、川岸も自然の植生で覆われ人工物がほとんど見られず、上流と下流の区別がつかない等、優れた景観が見られます。

洪水時には水中に沈む「沈下橋」(他県では「潜水橋」や「潜り橋」などと呼ばれています)が、四万十川だけで二一の橋が残っており、周囲の景観と調和し、橋を使って人が川に近づきやすい場があります。川沿いには小さな集落が点在し、川と密接に関わった地域住民の生活が営まれ、人と自然が共生しています。

高知県民の四万十川への愛着

一九九五(平成七)年三月に取りまとめた流域住民及び県民調査結果では、六五・三%の流域住民、八一・三%の県民が、「四万十川は自然景観が残る美しい川」と答えています。

一方、二〇一三年度の四万十川については、約四〇%の流域住民・県民が、「自然景観は現在と変わらないが、空き缶やちりなどが散乱し魅力のない川になっている」、「四万十川の人気は落ちている」と回答しています。

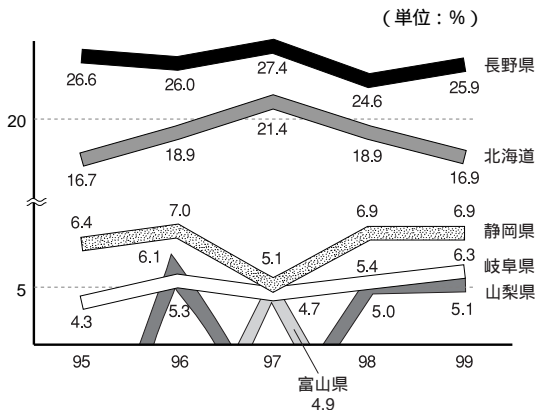
高知県は、四万十川に限らず清流といわれる大小の河川が多数存在し、遠方にある四万十川まで行かなくとも身近で体験できるため、四万十川そのものへの関心は全国の方々程無いのが実態です。むしろ、四万十川は全国の方々に高い評価を得ており、四万十川を訪れる高知県以外の割合は約八五%であるとの調査結果も出ています。また、四万十川をきれいに保つために、市民や企業、学校関係者など様々な方々と共に活動を行っています。



もっともおいしい水が飲めると思う都道府県と国を、1つずつ記入していただいた結果です。

ほぼ毎年同様の結果となっていますが、都道府県についての回答を居住地別に比較すると、「中京圏」では「岐阜」「長野」「愛知」の順になっており、地元の方の水に対する愛着が感じられます（B図）。また、国については、山や氷河のイメージと強く結びついていることがわかります（C図）。

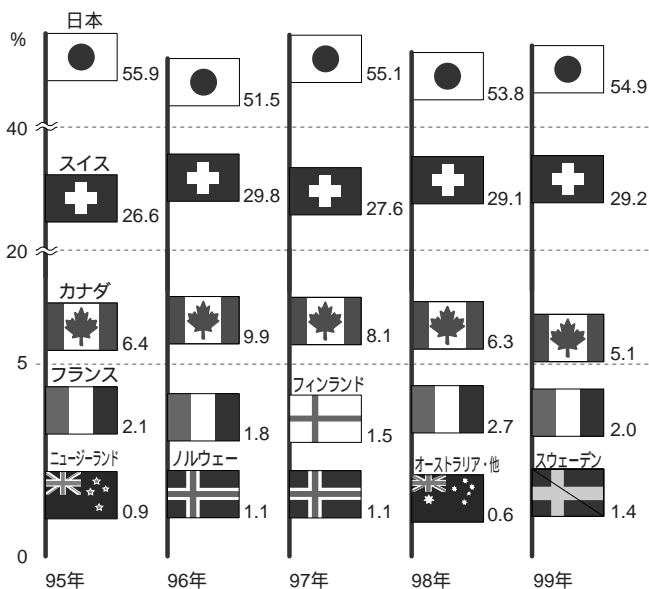
A. 《都道府県ベスト5 - 過去5年間の推移》
(単位：%)



B. 《東京圏・中京圏・大阪圏居住者が選ぶベスト3 - 99年》
(単位：%)

	東京圏	中京圏	大阪圏
1	長野県 24.2%	岐阜県 21.3%	長野県 35.5%
2	北海道 18.4%	長野県 19.7%	北海道 20.2%
3	静岡県 9.8%	愛知県 13.1%	高知県 5.6%

C. 《国別ベスト5 - 過去5年間の推移》 (単位：%)



Q13 もっともおいしい水が飲めると思う都道府県と国は？

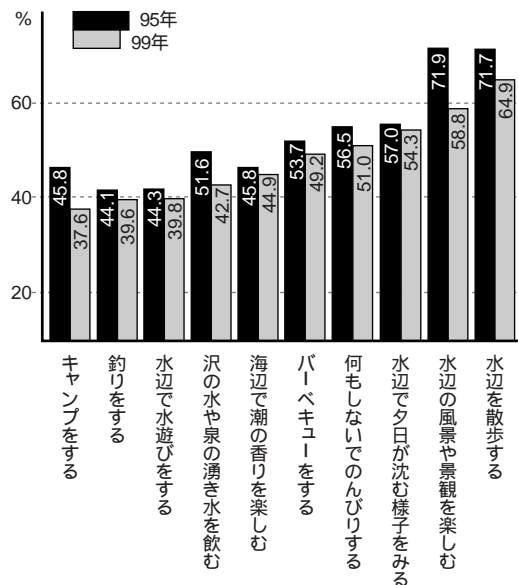
長野県と北海道で4割 国別では日本が一番

水辺に行ったらどのような楽しみ方をするか、複数選択していただいた結果です。

釣り、キャンプ、スポーツなどよりも、のんびりと静かにくつろぐ場として、水辺がイメージされています。ただ、'95年に「水辺を散歩する」は71.7%、同じく「水辺の景観を楽しむ」は71.9%でした。それに対し、'99年では64.9%、58.8%と下がってしまっているのはどうしてでしょうか。水辺の減少、生活者の嗜好やライフスタイルの変化でしょうか...?

Q12 水辺での楽しみ方は？

《水辺でやってみたいこと》 (単位：%)



現在の日本で、「水の都」という言葉に最も近いと思う町や都市を、1つだけ記入いただいた結果です(A・B図)。この他にも、水の都としてイメージする地として、次の地名が挙げられました(C図)。潮来、静岡、神戸、高知、長崎、金沢、北海道、倉敷、山梨、高山、富士山麓、東京、水戸、新潟、小樽、沖縄、名古屋、富山、萩・津和野、盛岡、上高地、松江、山形、広島、横浜、その他多数。こうして見ると、「水の都」と言っても、回答者は“舟運・水運の町”“清冽な水が残る町”“源水が湧き出るイメージがある山岳観光地”“川沿いに発達した古都観光地”など、いろいろなイメージを重ね合わせていることが分かります。

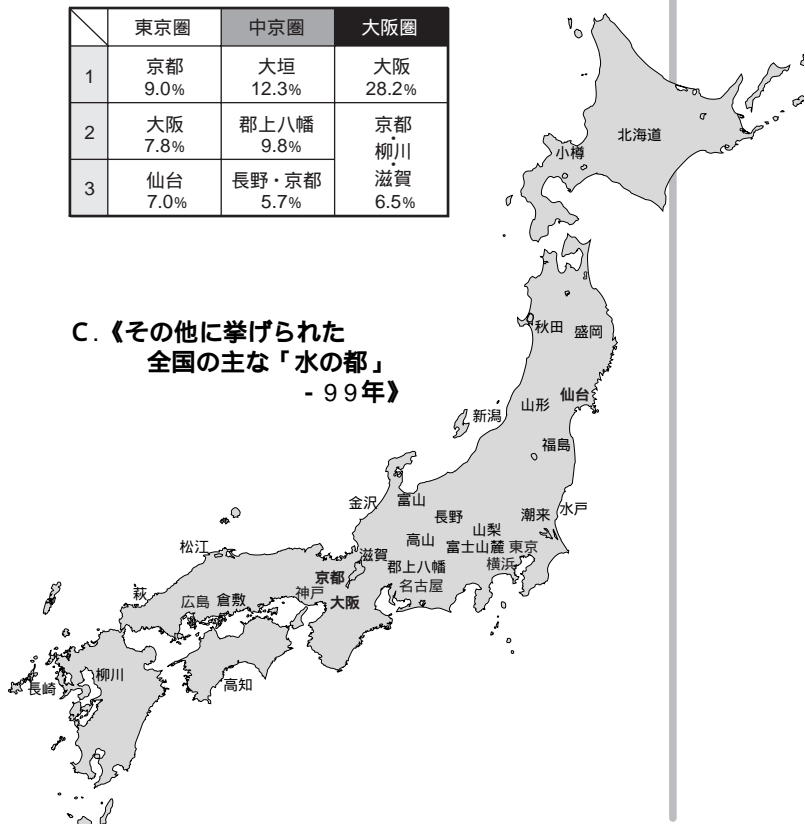
A. 《都道府県ベスト5 - 過去3年間の推移》 (単位：%)

	97年	98年	99年
1	大阪 10.3%	大阪 12.4%	大阪 12.0%
2	京都 5.6%	京都 10.9%	京都 7.6%
3	仙台 4.9%	大垣 4.4%	仙台 5.5%
4	滋賀 長野	仙台 4.2%	柳川 4.5%
5	柳川 3.6%	滋賀 3.6%	長野 3.7%

B. 《東京圏・中京圏・大阪圏居住者が選ぶベスト3 - 99年》 (単位：%)

	東京圏	中京圏	大阪圏
1	京都 9.0%	大垣 12.3%	大阪 28.2%
2	大阪 7.8%	郡上八幡 9.8%	京都 柳川
3	仙台 7.0%	長野・京都 5.7%	滋賀 6.5%

C. 《その他に挙げられた全国の主な「水の都」 - 99年》

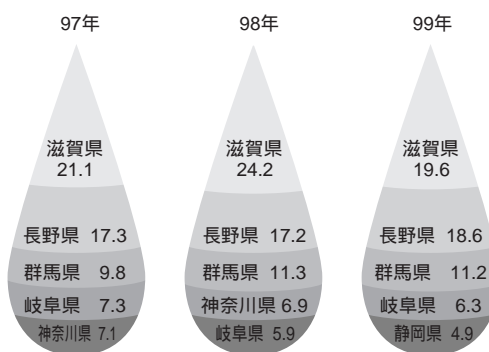


大阪と京都が過去3年間 1位・2位を占める

Q15 「水の都」のイメージにもっとも近い都市は?

「水の供給県」としてイメージする都道府県を、1つだけ記入いただいた結果です。回答者が居住している地域の水道水源地をイメージされている方が多いようですが、全体としては「滋賀県」「長野県」「群馬県」の順位がこの3年間続いています。

A. 《都道府県ベスト3 - 過去3年間の推移》 (単位：%)



B. 《東京圏・中京圏・大阪圏居住者が選ぶベスト3 - 99年》 (単位：%)

	東京圏	中京圏	大阪圏
1	群馬県 21.7%	長野県 27.9%	滋賀県 59.7%
2	長野県 16.4%	岐阜県 23.8%	長野県 13.7%
3	神奈川県 8.6%	滋賀県 8.2%	大阪府 4.8%

全体ではベスト3が過去3年間不動

Q14 水の供給地(都道府県)として思いつくのは?

「この調査結果を見て」
山梨県新聞論説委員
編集局長 深沢 健三氏
山梨県の北辺に横たわる奥秩父山系に甲武信ヶ岳(二四七五メートル)があります。太平洋と日本海の分水嶺で、笛吹川(富士川)・荒川、千曲川(信濃川)の最初の一滴がこの山で生まれます。三つの川の生まれた水の味は、地元びいきを割り引いても笛吹川が一番です。花崗岩から吹き出す水は甘露以外に形容ができません。また笠取山(一九五三メートル)は丹波川(多摩川)の源流

の山。この山の山頂近くに水干(みずひ)と呼ばれる場所があり、石の祠があるのですが、多摩川の始まりです。この水が小河内ダムに集まり、都民の生活を潤っているのです。一帯は都の水源地として大切にされています。また丹沢山系の道志村は横浜市の水道をまかかって百年を経ました。
山梨の水道水源は七割がミネラルたっぷりの地下水で表流水は三割。全国は逆です。山梨の「おいしい水」第五位は、源流県・供給県として喜ぶべきか悲しむべきか。イメージは「水もの」。ぜひ中身を味わってみて下さい。

INTERVIEW

インタビュー 早川 光

『湧き水の向こうに見えるもの』



早川 光氏

映画監督 1961年、東京新宿区生まれ。'84年、初の劇場用映画『アギ・鬼神の怒り』をアボリアッツ国際ファンタスティック映画祭に出品。最終選考に選ばれる。映画以外では水と料理への関心が高く、'88年の『東京の自然水』を皮切りに『名水巡礼東京八十八箇所』『おいしい水で料理が変わる』『ミネラルウォーター・ガイドブック』他多数。10月末に「江戸前ずしの悦楽」(晶文社出版)を上梓。現在は、月刊誌『東京人』に料理に関するエッセイ「舌鼓十二カ月」を連載中。



<http://www02.so-net.ne.jp/m-water/>

早川氏が個人で開設しているミネラルウォーター専用のホームページ。目からうろこが落ちる情報が満載されています。



早川氏の最新刊(マガジンハウス)

「一番おいしいと思う水は？」という質問に、二位以下に大差をつけて「湧き水」と回答した方が多数いらっしゃいました(7頁)。この結果について、“湧き水とミネラルウォーター”の専門家でもある映画監督の早川光氏にお話をうかがいました。

映画監督が 水にこだわったきっかけ

一九八五(昭和六〇)年頃に、昭和三〇年代を題材とした映画を撮る計画があり、東京でも古い町をロケハンして歩いていました。ちょうどバブルの前頃で、古い街並みがどんどん更地になっていった頃。その時に、自分が東京生まれなのに、知らなかったことがかなりでてきた。「都心に湧き水がある」「蛭の養殖をしている」「わさび田がある」。その時の経験を『東京迷走大図鑑』『東京の自然水』にまとめたのです。最初は、東京という都市と湧き水の不可思議な関係のおもしろさに惹かれていただけだったんですが、ミネラルウォーターブームとも重なって、水そのものを徹底的に調べるようになり、知識の蓄積もでき、九〇年代になり、ミネラルウォーターをテーマに文章を書き始めた次第です。

15年間 変わる水への志向

九〇年代前半位まで、人々の水への関心は「味」なんです。ね。「おいしい水」が最重要でした。次に、水を「飲む」という形だけではなく、お茶を入れるとかコーヒーを入れる、炊飯、だしを取るといった、違う利用法についての関心が生まれ、「水の使い分け」という発想が出てきます。

九五年頃だったと思います。飲むのはミネラルウォーター、料理は水道や浄水器。その時に何を基準にして水を使い分ければよいのか、どこまで浄水器で済み、どこからミネラルウォーターかという質問を結構受けました。『ミネラルウォーターガイドブック増補版』でも、「硬度いくつが何に向いているのか」ということを実験データに基づいて書いたわけです。そして去年、環境ホルモン問題がクローズアップされ、純粋に水の汚染の問題、「安全かどうか」と「飲んで健康によいのか」という質問を

今回の調査

「湧き水のイメージ」が トップに立つ」との意味

回答者は都市圏の方ですよ。溪流の水、自然の水、大自然の中から湧き出てくる水、森の中からこんこんと湧き出てくるというイメージが、都市生活者にとっては美しいものの象徴になっているのだと思います。

ただ、実際は、湧いて出てくる湧き水も地下に入っている井戸水も、同じ地下水ということで成分的にも内容的にも差異がない。むしろ地表に出てきた分だけ、様々な地表水と混入してしまつた危険もあり、「湧

多く受けるようになりました。明らかに水に対して内向きになってきている。グルメブームの時に、水ブームが高まったわけですが、その時は「味」が問題にされていた。それが「水の利用法」という関心を経て、最近では「安全性+健康への適性」です。

き水だから安全でおいしい」というわけではありませぬ。でも、都市生活者の幻想として、湧き水というのが非常に美化されているということでしょうね。

それと、どうも目の前で湧いている所を見ないと、市販のミネラルウォーターは中身が信用できないと思っっている方もいるかもしれませんね。

ミネラルウォーターがどういふものなのか、あるいは井戸の水と湧き水がどう違うのか一般の方に正しい知識が浸透していないのでしょ。

ナチュラルウォーター ミネラルウォーター ボトルドウォーター

一九九〇年に農林水産省が出した「ミネラルウォーター類の品質ガイドライン」があります。その大きな分け方がナチュラルウォーター、ミネラルウォーター、ボトル



ドウォーターという三分類です。わかりやすくいうとナチュラルウォーターというのは、最小限の処理で出している。ミネラルウォーターは違う水源の水を混ぜ合わせたリ、ミネラル分の調整をしている水。ボトルドウォーターは飲用水なら何でもいい。河川の水でも、水道水をつめても、水道法の「飲用適」であればいい。おおまかな分け方です。日本では湧水と地下水の分類があいまいですが、本当は地表に湧いてしまった水は、厳密に言えば「地下水」ではないわけです。地表の外に出た瞬間で空気に触れ、しかもそこに雨水とか周囲の有機物とかが混入してくる可能性がります。湧き水が湧いている泉は、見た目がきれいだから安全かということでもない。幻想なんです。特に最近、山奥の湧き水の出る裏に産業廃棄物処理場やゴルフ場があったりする所もあり、むしろ都心部の方が、工場もないしゴルフ場もないし安全だという言い方もできるわけです。

おいしい水と地下水の関係

地下水にもいろいろあります。地下水は地下に入った雨水が地層に浸透して濾過され、地下水脈になるわけですが、その段階で、周囲の岩石などのミネラルを溶かし込むわけです。でも、おいしい、おいしくなっていくのは、それに加え、地層の条件が影響するわけです。地層によっては鉄分など金属イオンの多い水になる。苦灰岩の地層ではマグネシウムが多く、石灰岩が多いとカルシウムが多くなる。日本の場合、火山国なので、火山岩の成分がとけ込んだりしますし、味は地層の構造によって決まってきます。

日本の場合は、たまたま日本の地層構造の大部分が火山岩で構成されていて、比較的水を浸透しやすい地層にあり、短時間に地下水がでかかります。しかし、その分ミネラル分が含まれにくい。だから、日本の水は軟水であり、歴史的にも軟水を飲み続けてきました。それゆえに、日本人は軟水こそがおいしい水と思っています。

今回の意識調査で、一番おいしい水を飲める国としてスイスやカナダが挙げられますが、やはり、きれいな山があつて、水河があつたり、ピュアというイメージがあるのでしょ。実際には、スイスと日本とは全く違う地層構造をしています。スイスの水は硬度の高い水が多い。カナダは日本と同じ環太平洋火山帯に位置しており、日本の水に比較的近い。カナダ、スイス、スウェーデン、どれも氷河というイメージですが、山のあくまでも表面しか見ていな

いわけです。水の成分構成とか味を決めるのは、地層であつて地表ではありません。

ヨーロッパについての湧き水

ヨーロッパで同じ様なアンケートをとった時に、おそらく「湧き水が一番おいしい水」という回答はでないと思っんですね。日本の湧き水の場合、浅い所に水脈がある。ですから、崖地など浅い所にある水脈が断ち切られて出てくる。それが湧き水なんですけれど、ヨーロッパにそういう所はあまりないですね。むしろ、地下の深い所にある水脈が地殻変動などによって切れ、その切れ目から噴出してくる。泉ですね、スプリングウォーター。日本の湧き水は地層の切れ目からちよるちよる出てくるスタイルですけれど、ヨーロッパの場合、泉のように噴出してくる形が多い。ですから、水が地下深くにあることで安全性が保たれているというイメージが非常に強くなる。

加えてヨーロッパ人は川の水を飲むことでベストやコレラに感染して、国が減るような経験を何度もしているので、泉の水をものすごく大切にします。キリスト教にまつわる奇跡伝説があるぐらい、水は神聖なものであるというイメージがある。泉が非常に貴重なものであるために、手厚く保護するわけです。今、ヨーロッパでは厳格な水源保護が行われていますが、そういう考え方は中世からありました。



INTERVIEW

インタビュー 陣内秀信

『世界水の都』



陣内秀信氏

法政大学工学部教授 1947年福岡県生まれ。
東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。著書
に『東京の空間人類学』『都市を読む - イタリア』
『ヴェネツィア 水上の迷宮都市』他多数

「日本の水の都としてどこをイメージしますか？」という質問がありました
(10頁) では、世界の水の都というと、皆さんはどこを思い浮かべるでしょう
か？ 法政大学教授の陣内秀信氏にうかがってみました。

僕が選ぶ世界水の都 十都

まず、ヴェネツィア(イタリア)、そしてその大陸側のヴェネト地方の町トレヴィーゾ(イタリア)。近郊の農村部がベネトンの発祥地ということでは有名な所です。ヴェネツィアに隠れていますが、知られざる水の都です。

ミラノ(イタリア)も東京と同じ様に水のネットワークを張り巡らせていた都市です。たとえばドウオモ(大聖堂)の石は舟運で運んできたものです。でも、近代化の過程でかなりの運河を埋めてしまい、今は幸い三系統だけ残っています。それをナヴイリオといいますが、そこが、今やロンバルディア地方の若者が週末に押し寄せるたいへんな賑わいの地になっています。

それと、ブリュージュ(ベルギー、現地名はブルツヘ)。ここは、ヴェネツィアを追いかけるように発展し、経済中心となった中世都市の代表で、やはり運河が巡っています。現在では、実用的な水運はほとんどなくなりましたが、観光船で周遊でき、北のヴェニスと呼ばれています。

このブリュージュの繁栄を受け継ぐ形で、水の都として君臨したのが



ブリュージュ(ベルギー)

阿姆斯特ダム(オランダ)です。ヴェネツィアからブリュージュ、そして阿姆斯特ダムに至る系列は、ヨーロッパの都市の歴史を語る上で欠かせないものです。おもしろいのは、ちょうど阿姆斯特ダムと江戸がほぼ一七世紀の同時期に大々的に形成されている点です。

これまで選んだのは、都市の中に運河が巡っている「水網都市」(上田篤・京都精華大学教授が、こう命名しています)です。これと異なるのが、イスタンブール(トルコ)。ここは、海と湾、海峡という三つの水域が町に面しています。イスタンブールは旧市街と金角湾をささんで北にある新市街(新市街といってもジェノヴァ、ヴェネツィアといったヨーロッパ系の人々がいた古い町を核とする所で、近代にできた経済中心地になっています)。そして、東側の小アジアとの間にボスポラス海峡が位置し、船が三つのエリアを行き交っています。



ニューヨーク(アメリカ)



蘇州(中国)



バンコク(タイ)



ジャカルタ(インドネシア)



イズミル(トルコ)

舟運は活発、橋も印象的で、水域をささんだ対岸を見る風景というのが非常に印象的です。坂が多い、斜面都市なので、水を見るパノラマが昔から尊重されて、海が見えるアパートは家賃が倍になるといって町です。

アジアに目を向けると、やはり蘇州(中国)。マルコ・ポーロが「自分の故郷の町のヴェネツィアに似ている」と言ったので、東洋のヴェニスと言われています。でも、中国人に言わせると「ヴェニスよりも蘇州の方がずっと古い。ヴェニスこそ西洋の蘇州だ」と言いますね。水の都市の本家の様な所で、一二世紀に書かれた地図を見ても、中世の段階で現在に受け継がれている水の都市の骨格が、完全に出来上がっていたことがわかります。これも水網都市です。

同じ水網都市としてバンコク(タイ)があります。だいぶ運河を埋めたとはいえ、今でも非常に感動するような水の都です。何よりも、水と生活の距離が一番近い。人の生活が水に非常に近い。水の中に入り体を洗ったり、水上に家造ったりしています。

それと、ジャカルタ(インドネシア)も、かなり掘

割りや運河を埋めてしまった水の都ですね。もともとオランダが作ったパタヴィアがコアになっていて、その周辺に中国人が住む町、さらに地元のイスラム教徒が住んでいる、カンポンという庶民地区がある。路地を巡らした高密な空間なんですけど、それらのエリアを区切るのに運河が巡っています。おもしろいのは中心部の元パタヴィアだったエリアはオランダ人が作っているんで、アムステルダム都市の風景と似ている。跳ね上げ橋があったり、のこぎりの刃のような屋根の煉瓦造りの家が並んでいる。ニューヨークもはじめはオランダ人が入植したので、運河を造って、アムステルダム風の建物が並んでいたことが古い鳥瞰図で分かっています。つまり、オランダ人が大航海時代に世界中に水の都を移植してきたわけです。ニューヨークの場合はその後、イギリス人が受け継いだので運河を埋め、陸の町にしてしまいました。

そのニューヨーク（アメリカ）は、実は新しいタイプの水の都です。水網都市ではない。半島のようにマンハッタンが突き出し、両側にハドソン川とイースト川の二つの川が流れ込んでいて、三面を水に開いています。しかも川の幅が広い。東の対岸を結ぶブルックリン橋など非常に勇壮な橋が一九世紀末に建設され、橋と大きい水域が作り出され、同時に高層ビル、摩天楼といった象徴性をもった近代初期特有の大規模な水の都市ができあがっていきました。そして、港湾では、近代の特徴でもある桟橋が突き出し、多数の船が行き来してしましました。現代の港の原型です。船が大型化する



アムステルダム（オランダ）

につれ、桟橋も大型化し、桟橋が何十も並ぶという壮大なウォーターフロント景観が、作り出されていきます。自由の女神も水の都市を意識しているわけですから、対岸に作り、それを展望する。そしてそこに皆が行き、マンハッタンを反対側から展望する。アメリカ人は、船で新大陸にたどり着いたという歴史があり、帆船のイメージを自らのアイデンティティ・イメージとしてもっています。ですからウォーターフロントが再生されると、港にメモリアル・オブジェとして帆船を置くというケースが多い。一九七〇年代終わり頃から古い港湾を再開発するウォーターフロント再生という動きが活発になってきますが、近代港湾都市的に水に開かれた空間が、老朽化し再開発を経て、今また市民に開かれていっている。水の都市が成長している格好の例だと思えます。

水の都とは

世界と日本の相違

僕が今挙げた中で、世界の人が一般に水の都として挙げるのは、ヴェネツィア、フ



ミラノ（イタリア）



トレヴィーゾ（イタリア）



ヴェネツィア（イタリア）



イスタン

リユージユ、アムステルダム、蘇州、バンクの五都市だと思えます。逆に、今回、意図的に挙げなかったのは、大きな河川が一本、町の真中をゆったりと流れていて、両側に歴史的な町が展開しているという都市です。このパターンは非常に多い。日本では、例えば京都や仙台などが良い例でしょう。日本では水の都というと、これらが上位に来ているのが面白いですね。（10頁）

やはり、日本人は、川に情緒性を感じているのでしょ。河辺には自然があります。ところが、ヨーロッパの川というと、その両側にきっちり人間がモニュメントなどの構築物を作っていく。例えば、代表はパリですが、シテ島にノートルダム寺院を造り、裁判所をつくり、川沿いにルーブル宮を作る。そして両岸を石の橋が結んでいる。「人工物で固めたダイナミックな景観」これが水の景観ですね。彼らは、緑が多いとか、季節によって表情が変わるといった意味での水の景観意識は少ないと思います。

日本の場合は季節によって、川沿いの表情が変わります。水場の遊びの空間ができ、開放的な広場として水辺を使ったりしていきます。日本の川には自然のイメージが入らないと、水の景観にならないのではないかと。それに、日本の川は暴れ川だから、流れてしまい、安定しない空間なわけです。誰もそこにモニュメントを作ろうとは思わない。変わりゆくうつろいゆく、はかなさがないのではないですか。

しかも河原は、ヨーロッパの河川にはあまりありません。河原には流れ者が集まったり、遊郭、料亭など、自由空間ができやすかった。コミュニティの安定した土地に立脚した制度が陸の方にあるとすれば、川の方にはある種の自由空間があり、アウトローが集まりやすい。そこにモニュメントを作ろうとは誰も思わないわけです。河辺の空間といっても、ヨーロッパの様にパブリックな空間として構築される場合もあれば、日本の河原のように、庶民の民衆的な空間が息づいてきた場合もあるわけです。



『有明海とアオ(淡水)の世界』 佐賀

「水の文化とは」と問われるとき、まず心に浮かぶのが、アオ(淡水)の文化です。アオとは、上げ潮に乗って海からやってくる川の水のことですが、そんな水を使って、太古の昔から最近まで、独特の世界を築き上げてきたのが有明海沿岸の人たちなのでした。

先ず、アオの説明をしましょう。

有明海は干満差の大きい海であり、六角川河口などではその差が六メートルにも達しています。筑後川を初めいくつもの川から吐き出された水は、干潮時、海水に載ってはるか沖合に運ばれ、そして満潮になると比重の重い海水の上に載ったまま、また陸地に押し戻されます。その、高い水位でやってくる淡水を取水して利用してきたのが、有明海沿岸の農民たちでした。

有明海沿岸は日本を代表する大干拓地帯であり、そこはまた、クリーク地帯でもありません。そのクリークは、アオを貯めて置く溜池

でもあったのです。

私がこのアオのことを知ったのはあの有名な福岡の大湧水、いわゆる五三年湧水の頃でした。水のことなど考えもせず、自己の貴重な水源であるはずの森林や溜池、水田を平気でつぶし、ただひたすら人を呼び込んで百万都市を造り上げてきた福岡市。金に任せてダムを造り、五つ作り、六つ作り、百万都市の水はこれでもう大丈夫という、その六つ目のダムが完成したとたん、六つともダムが空になってしまった五三年湧水。

この湧水の時私は、テレビの朝の番組などに呼ばれては、しばしば福岡との間を往復したものでした。

けれど、連日の断減水に悩む市民の皆さんから寄せられるのは、もっぱらお隣を流れる川、筑後川の水をくれ、あの川には上流のダムにも川にも、下流のクリークにも水があるではないか、との声でした。自己の水を死守

しようとする筑後川流域の人たちにとって、それはあまりにむごいことでした。対立する

大都市と、農民、漁民とのその姿を見るにつけ、私はものを知らないといふことの悲しき、怖さを考えさせられたものでした。水というものは本来は、自己の水系、自己の水源の中で対処すべきものであり、そして筑後川の水はみな、農民たちが命がけて作ってきた水でした。そしてまたクリークは、そこが水の乏しい地方であることの象徴でもあったのです。

翌年私は文藝春秋に『水の文化史』(注1)を連載することになり、アオについて思い入れを込めて書きました。更に『日本再発見の旅』(注2)にも別の形で紹介しましたが、ついに『日本の米』(注3)の冒頭に、このアオを再々度登場させたのです。「吉野ヶ里はなぜ滅びたか」という謎解きの形で。吉野ヶ里はアオによって栄え、アオによって滅びたのではなかったか。(むろん当時の環境の



初春の城原川

(1) 富山和子『水の文化史』
文藝春秋 1980年

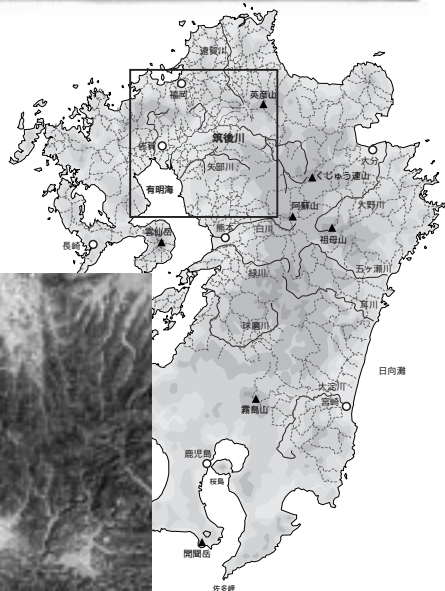
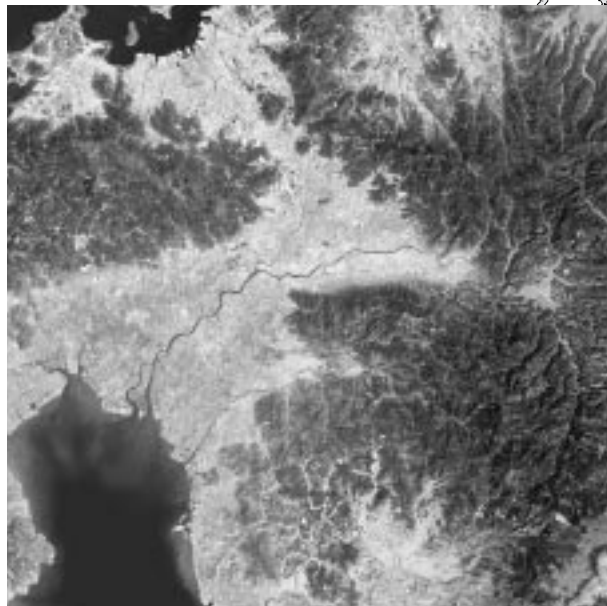
(2) 富山和子『日本再発見 水の旅』
文藝春秋 1987年

(3) 富山和子『日本の米』
中公新書 1993年



かつての城原川と環濠集落
(神崎郡千代田町付近)
写真提供：宮地米蔵氏

有明海と筑後川流域
(ランドサット衛星写真1994年6月撮影)
九州北部は南にくらべ山が浅く、平野が広い。



変化と少しずつ、べつの要因も考えられるにせよ、
です。
恐らく歴史の初期の時代には、アオは中国
はもとよりベンガル湾などアジア諸地域の海
岸の低湿地でも、いえアジア以外でも使われ
ていたことでしょう。そのアオが、日本では
稲作の初期、古代吉野ヶ里王国を育て、その
盛衰の歴史を背負い、以来連続と筑後平野を
養いつづけ、そして現代に至ればあの佐賀段

階という、やはり歴史的な佐賀平野の栄光の
一時期を築き上げるのです。
ローマンに満ちたそのアオの文化が、いま絶
えようとしています。一九九八(平成一〇)
年、筑後川下流用水事業が完成し、それまで
不安定なアオ取水に頼っていた農業用水は、
ダムの水を使うことに切り替えられたからで
す。この時点で、稲とともに二千数百年続け
られてきた日本のアオの歴史は、ヒリオドを

打つことになったのです。
とはいえ、まだわずかにアオの伝統を受け
継いでいる人たちはいます。その人たちが健
在の間に、何とかその知恵や技術を記録に残
したい。そんな思いで、地元農民たちと深く
つきあつてこられた行政法学者で特異な水問
題の研究者、宮地米蔵さんに、お話しいた
くことに致しました。

この対談は、一九九八(平成一〇)年二月に行われたものです。

富山 五年前、佐賀テレビの「クリーク幻影」という長時間番組の出演で、ロケのためしばらく現場を歩いたことがありました。そこで知らされたのですが、佐賀市民の中にも、アオのことをご存知ない方が増えてきました。クリークは、ふたをされたり統合されたりして、以前とはすっかり姿を変えたものの、まだ掘り割りとしてある程度残ってはいるのですが。

それに、これは全国的にいえることですが、農業用水までが蛇口の水になり、農民の生活にも昔のような、「水を死守する」といった緊張感が薄れつつあります。そんなところに筑後川下流用水が建設され、アオから普通の川水への転換となったのです。歴史的な一大転換でしょう。

とはいえ、佐賀平野は広い。アオ取水の樋門だけでも無数にありました。で、いったいアオ取水は現在、どうなっているのでしょうか。

昔は桶で汲み上げた

宮地 アオが下流から上つてきますが、川全体の水量が少なくなっていますから、アオの水質がだんだん悪くなっております。一九五三（昭和二八）年の大水害（注4）のあと、災害を防ぐ名目で、上流域に下笠（しもうけ）・松原ダム（注5）が、一九八四（昭和五九）年には下流域に筑後大堰が完成しまして、本流の流れ自体が少し変わってしまいました

た。それで一番最初にその影響を受けたのが筏流しです。筑後川の上流というのは日田市とか小国町とか杉の美林がある所で、それを筏に組んで流していたわけです。下流域のほうは特殊なクリーク地帯ですが、そのクリークの水位が田圃より低いです。だから人間の力で、クリークの水を水田に流さなくてはいけないんですが、昔は大きな桶にヒモをつけてまして、田の窪地に二人向かい合って、桶で水をくみ上げていたんです。それがやがて、足踏み水車になるわけです。足踏み水車には日田杉を使うわけです。大川（注6）は今は木工家具で有名ですが、もともと大川の木工技術というのは足踏み水車の製造が始まりでした。この足踏み水車を万右衛門車といいます。上流にダムができて、筏流しが出来なくなり、それでも筑後川でアオを取っております。けれど、そういう所の水質が、だんだん塩分も濃くなってまいりまして、ずっと下流佐賀でいいますと、犬井道・南川副の漁港がありますね。あのあたりでアオを取っております。取れなくなりました。その次には、筑後川河口部に大中島がありますけれども、これがいわゆる福岡県側では大野島、佐賀県では大詫間島（おおたくましま）といいますが、ここでも筑後川から取水する。けれど筑後川下流域は、大体は有明海の入り江と考えていいわけで、低い所を流れておりますから、大変な人間の労力をかけないと、低い所から高い所へ水を運ぶことはできないわけです。幸いにして、有明海は六メートルの

干満の差があるので、満潮の時に水を取れば、ずっとクリークへ流れて行く。「海の水で塩水でしよう」と皆さんお尋ねになるわけですが、うまくできてはいるわけで、水って不思議なもので比重の関係で重いものが下の方に沈みますから、上の方は上流から流れてきた淡水なんです。それを淡水と書いてアオと言っているわけです。

養水と用水

富山 アオは、東京湾沿岸でも昭和の初めまでは一時取っていましたし、木曾川水系でも最近まで取っていましたね。

宮地 木曾三川（木曾川、長良川、揖斐川）それから岡山、同じ九州では熊本の本緑川でも取ってありました。

富山 やはりどんどん減ってきていますね。

宮地 だんだんとね。水質が悪くなってきましてからね。

富山 これだけの干満差だから、特にここは取りやすかったのでしょうかね。

宮地 そういうことです。だんだん下流の方から条件が悪くなってきましたから。それでもね、上流からすこし余計に流してくれれば

(4) この年六月二十五日の豪雨で、佐賀市では一時間に七・三三ミリの降水を記録し、翌二六日昼までには四百ミリの大雨となりました。被害は全県下に及び、死者五九名、行方不明八名、負傷者三三六名、被害総額は二四九億円で、これは当時の県民総所得の六割に当たる。これにより、筑後川流域と佐賀地方平野部は一面の泥海と化した。

(5) 筑後川の上流（大分県）に位置するダム。下笠ダムは一九七三（昭和四八）年に完成。

(6) 福岡県大川市。筑後川河口に位置し、有数の家具生産地として知られる。

アオ灌漑

アオは、「淡水」と書く。満潮時、海水に乗って逆流してくる川の水をいう。

有明海は干満の差が日本一大きく、筑後川河口で5メートル、六角川河口で6.5メートルに達している。干潮時、川から吐き出された淡水は、はるか沖合いに運ばれて、やがて満潮時、比重の大きい海水の上に乗る、高い水位で陸地へ向かって押し戻されてくる。その淡水を利用して米作りをつづけてきたのが、水に恵まれない筑後川下流平野の、クリーク地帯であった。

いいかえれば、川が吐き出した水を、海が陸地にお返ししてくれる。それを汲み上げて、大地に返していたのである。

とはいえアオ取水は月二回の大潮に限られる。水は貯めておかなばならない。網の目状に走るクリークは、一つには、低平の農地に土を盛り上げるため掘った跡であったが、一つにはアオを貯わえておく溜池でもあった。

満潮時、海からアオがやってくると、人々はクリークの樋門を開ける。するとアオは怒濤のごとくなだれ込む。人々は夜を徹して水を守り、水の色、泡立ち具合や味を見て、海水が混じりそうになると樋門を閉める。そのため的大小の樋門が至るところに作られていて、それが独特の景観であった。立派な石積みの樋門もあれば、板一枚の簡単な板堰もあった。

筑後大堰ができたいま、農業用水はゆくゆくは、ダムの水に切りかえられる方向にある。が、少なくともいまのところ、アオ取水はつづけられているのであり、この一帯を歩くと、時折り古い樋門に出会う。そのたびに私は、日本人と水とのつきあいの深さを思う。

アオは、わずかではあるが木曾川でも最近まで使われていたし、また関東では中川筋の埼玉県南埼玉郡潮止村(現八潮市)で、昭和2年まで、「日照りのとき、上げ潮の水を水車で引き上げて利用していた」という記録がある。

(富山和子『日本の米』中公新書より)



クリーク密度図
堰(クリーク)を中心とした筑後川下流。(原図: 深川 保)

筑後川下流用水事業とアオ取水の現状

筑後川下流地域に広がる広大な水田地帯は、水に恵まれない地域でもあった。そこで用水の安定確保を目的に、1976(昭和51)年に始まった農林水産省による「筑後川下流土地改良事業」の中から、筑後川からの取水施設、導水路等の基幹となる施設の工事を1981(昭和56)年に承継して実施されたのが、水資源開発公団による「筑後川下流用水事業」である。筑後大堰(1984・昭和59年完工)上流部の両岸に設けられた取水口より一括して取水し、用水路で佐賀・福岡両県の8市24町1村の田畑に水を送ろうという事業である。これにより真水を安定して取水す

ることが可能になったといわれている。

一方、この事業により、アオ取水も、新たな用水路よりの取水に切り替わることになった。従来より農業用水として利用されてきたアオ取水のための施設が192箇所あり、それらを統合し合口取水することになったためである。1996(平成8)年より試験通水が、本年4月1日より本通水が始まり、これにより事実上アオ取水はなくなった。ただ、アオ取水に関連した既得水利権から新用水への水利権への切替に、同意していない地区も若干残っている。

< 1999(平成11)年7月末現在 >



宮地 米蔵氏

1919(大正8)年、佐賀県に生まれる。
九州帝国大学法文学部卒業。
福岡大学法学部教授を経て、久留米大学教授、同
客員教授。1996(平成8)年、同大学退職。
主な著書に『水漬く山里』『貧乏県物語』『佐賀平
野の水利慣行』『筑後川農業水利誌』『佐賀平野の
水と土』『水の博物誌』『日本国行政法講義』、その
他著書論文多数。
研究の基礎は、フランス革命以来の課題である
「自由と平等」及び「共同体」community(コミュ
ニティ)においている。

「水の会」の主宰者。絶えず川を歩いている。

ば、取れるのではないかとということ、実は
一九七八(昭和五三)年の湯水の時に、下流
の、特に大中島のアオ取水のために、下笠・
松原ダムの水を放流してくれとずいぶん細か
い打ち合せをしましてね。その時はうまくい
ったんです。

肝心な灌漑期に必要な流量が流れてくれな
いと困るわけです。このあいだ蛤水道(注7)
でお会いしましたね。平六湯水(注8)の後で
したな。あそこで東背振の村長が言っ
たな。「今年は、山一帯が自分の貯えている
水をすっかり減らしたんじゃないでしょ
うか。いつもと違って、全然流れに勢いがあ
りません」と。だからあの時本当に、さすが
の蛤水道でも水量が減っていましたね。水資
源は微妙なもので、あるからといって勝手に
使うのではなく、自然に流すべきものはち
んと流すというように、使い方をもうちょっ
と上手にしないと。たとえば戦後、ダムを一

生懸命造っていた時期には、「川が一定の働
きをするのに、維持流量というのがなければ
ならない」などという、そんな考えなかつた
でしょう。

結局、流域全体として川をどう使うのか、
上流、中流、下流それぞれの農民なり漁民な
り市民の暮らし、それをトータルとしてバラ
スをとった形での、水の使い方を考えなくて
はいけない。かつて、江戸時代までは用水と
いうのは、養つ水と書いておりましたな。つ
まり、田畑や人畜を養つ水。全体として水を
とらえていたんですな。

富山 そうそう。ところが現在は、更に狭め
られてしまった。農業用水ならば、農民の生
活のための水すべてが含まれる。事実、用水
は野菜や農具を洗つ水であり、洗濯の水であ
り、村の防火用水であり、船を浮かべる水で
あり、子供の遊ぶ水であり、魚を養つ水であ

り、実に多目的に使われてきたはずでした。
それがいつの間にか「灌漑」用水と、意味を
狭められてしまった。そんな風なことさらに
狭く限定させ、灌漑の用途以外には価値を認
めず、余分な水は皆集めて都市にまわせ、と
いう方向で水の整理統合が進められた。用水
が地下にしみこみ水を養つことも、周囲の空
気を潤すことも、よけいなこと。それは浪費
で、「漏水」なのだから、すべからずコンク
リートにして水を一滴でも無駄にするな、都
市へまわせ、という思想です。日本の農業が
ここまで追いつめられてきた陰には、そうし
た厳しい都市化社会の風土がありました。

宮地 だから日本人の水との付き合い方とい
うのは、われわれの暮らしのリズムと自然の状
態にある水と必ずしも噛み合わないわけ
です。

ところで、われわれがある催事を行います
ね。そうしたら主催者は、「幸いにしてお天
気に恵まれましたけど」と言ったり、「あい
にくの雨ですけれど」と言ったりしますね。
もしその時、日照り続きのお百姓さんだつた
らどう言うでしょうか。「本当に恵みの水だ
って言うでしょう。片方はあいにくというの
に。それくらい人間というのは、人のことは
わからない。自分の暮らしを中心に考えている
わけ。水を考える時に、ある地域の人にとつ
てもしくは、ある職業の人にとつてもしくは
ある都市にとつては、と考えていくと、今
みたいに「用水」という「誰かが用いる

(7) 元和年間(一六一五―一四)成富
兵庫茂安によって東背振村に建
設された用水路。明治以後改修
が行われ、現在ではコンクリー
トの用水路となっている。

(8) 一九九四(平成六)年の記録的な
湯水。特に、瀬戸内地方や北九
州地方では長期間の取水制限が
相次いだ。

水」という特定の概念が生まれて、角突き合
わせることになるのではないですか。

クリークとのつきあい方

に見る農村の知恵

富山 筑後川といえば私は、五三年渇水の強
烈な印象が忘れられないのです(注9)。筑後
川の水を貰いたいと、福岡市民は声をあげる。
が、水を分け与えるということはそんな簡単
なことではないのですね。まして、筑後川
も大渇水です。ところが市民からの声は、ダ
ム、それも発電ダムに水がたまっているのは
けしからぬ、いや、川に水が流れていること
さえけしからぬ、といったくあいでした。水
というものについても、水とのつきあいの歴
史についても、知らない。アオのことも知ら
ない。都市と農村とのこの断絶がいかに深刻
なものか、考えさせられました。

宮地 やっぱり都会では、動物にしても人間
にしても、本当に暮らしを通じて、「お互い
が生きものだ」という形でつきあっていない
ですね。渇水の場合に、「取水制限をするこ
したらどちからかはじめるか」と、今でもそ
ういう議論になるんです。そうすると都市用
水、これは生活用水だ。だから一番最後だと
いう。まず槍玉に上がるのは工業用水で。と
ころが考えてみたら、工業用水にしてもそれ

が止まったら工業生産できなくて、それで食
べている人の暮らしがどうなるかというこ
ろ。例えば、日照りが続きますね。昔からそ
ういう日照りが続いた時には、ちょっと辛抱
して、水は「あなたの所はこの次に回します
から」という水のローテーションを組んでま
すね。日割りだとか時割りだとか。ところが、
それが分かっていてもつい日割り、時割りを
無視して水を盗む人が出てくる。そういう時
には、お互い相手の事情が分かっているから
その地区の長老たちがじっくり事情を聞いて
ね。そうしたらこう言うんですね。「何しろ
目の前で自分の田んぼが泣いている」と。本
当に生き物を育てているという感覚が出てく
るわけなんです。ところが、田んぼが泣いて
いるからどんな水でもいいかというと、一九
九四(平成六)年の渇水の時には、筑後川に
潮が満ちてきますね。それでそこからアオを
引こうとする。けれど、それは塩分が濃くて

うっかり入れたら逆に稲が死んでしまつ。そ
ういう時、じっと我慢してお互いにローテー
ションを組んで、上流と下流とがうまくやる。
このへんの農民の本能的なカンがある。

富山 海からの潮と、上流からの水ね。同じ
分け合つにしても潮が入ってきてという、そ
のへんの農民のカンや苦心の類の話はたくさ
んあるでしょうね。

宮地 いっぱいあります。例えば、つい最近
まで代表的なアオの取水樋門といわれていた
新川の寺井水門の水番を代々やっていた人
は、アオの切れ具合で塩分が濃くなったこと
がわかるといいます。それは、目で見て耳で
聞いて、最後は舌で聞くとね。

富山 耳で聞くというのは、どういふこと
ですか。



富山和子氏

立正大学教授・日本福祉大学客員教授

群馬県に生まれる。早稲田大学文学部卒業。
水問題を森林・林業の問題にまで深め、今日の水、
緑ブームの先駆となる。また「水田はダムである」
という重大な指摘を行ったことでも知られる。著書
『水と緑と土』は環境問題のバイブルといわれ、25年
間のロングセラー。自然環境保全審議会委員、中央
森林審議会委員、河川審議会専門委員、海洋開発審
議会委員、瀬戸内海環境保全審議会委員、中央公害
対策審議会委員、林政審議会委員、食料・環境・農
村基本問題調査会委員。環境庁「名水百選」選定委
員など歴任。「富山和子がつくる日本の米カレンダー、
水田は文化と環境を守る」を主宰。
主な著書に『水と緑と土』(中公新書)『水の文化史』
(文藝春秋)『日本の米』(中公新書)『川は生きて
いる』(講談社、第26回産経児童出版文化賞)『お米
は生きている』(講談社、第43回産経児童出版文化賞
大賞)『水と緑の国、日本』(講談社)などがある。

<近況> 21世紀、地球を養うには、麦ではなく
「米」しかないことは世界の常識となっています。そ
こで、世界の稲作文化国が連合組織を作り、稲作文
化の評価・研究・啓蒙活動に努めようと、各国で準
備が進められています(Japan-Asia Rice Foundation:
日本アジア米基金 仮称)。去る9月、バンコクで会
議が行われましたが、日本からは富山和子氏が代表
として出席しました。

(9) 富山和子『水の文化史』で詳述

宮地 アオの切れ具合でね。「異色のこだわ
り派ディレクター」として知られる片島紀男
君(注10)が若いとき、私のそついつ話を聞いて
ね。樋門を開ける時にその音を録音して歩
いたんです。一番潮の高いのは、八朔潮(注11)は
つさくしお(注12)の時、九月ぐらいですよ。
その時のアオをのつけて潮が上ってくる音と
いっつのは、爽やかですな。

富山 アオをのせて潮が上ってくる音といっ
つのは、月によってかなり違うのでしょうか。

宮地 やっぱり川によって違う気がする。昨
夜食事した時、給仕してくれた仲居さんの一
人が、「新田大橋」の上から聞く潮の上って
くる音はすばらしい」と言っていましたね。
でもね、新田大橋は筑後川本川最下流の橋で
すが、本川から小さな筑後川の支川に入っ
てきますと、もっと素晴らしい音がしますよ。
武雄のほつ六角川では鳴瀬という所があり
ますが、あの鳴瀬というのは、潮が上るとき
の音から鳴瀬といっつらしい。

ところで、農民は灌漑時期になって水を使
う時には、農民の川の使い方します。自分
たちが水を使わない時には、川はできるだけ
自由に流れるようにするといっつものです。つ
まり用水堰はね、使わない時(非灌漑期)に
は解放しておくんです。解放している用水堰
を堰きあげる。これを、所によって言葉は違
いますけど、「こいらでは「井手揚げ」とい
う行事になる。井手(イデ)といっつのは堰の

こと。井手を堰きあげるところから、お百姓
さんの一年の水の行事は始まる。その前に、
井手は自分たちの村々に引いている水路がな
ければいけないわけ。一番下流の村から水路
をすうつと浚(さら)えていくんです。で、
例えばこれが八千口あるとすれば、一番下流
の村が一番負担が大きい。途中の村を通過
してその堰の所まで水路を浚え掃除していく。土
砂も溜まっていますし。下捨えをして料理に
かかるのと一緒ですね。それが井手揚げです。
夏も近づくと八十八夜つてあるでしょ。その
前後は全国どこの地域でも、この井手揚げの



城原川 お茶屋北

行事が始まるわけです。その前に水道公役
(くやく)がある(注12)。水道公役にしても井
手揚げにしても、どのくらい人間が必要で、
どれだけの材料が必要なのか。その材料がね、
下流にもまだその井手がありますから。例え
ば、城原川なんかは草堰がたくさんあるでし
ょう。あの草堰は下流への配慮をして水を取
っている。いらない水はちゃんと下流にあけ
る。代表的なのは山城の国。京都の桂川で、
当時の莊園ですよ。あそこでは下流に多く
の農業用水がある。石のあいだからちゃんと
水が漏れるような仕掛けになっている。石の
間から滴る漏れ水を、下流の用水に充てる
と書いてある。そついつ川の中で全体を見て
いるんですね。今の人間は自分の所だけしか見
てないでしょう。

富山 実はその桂川は、世界の自然保護行政
の発祥地、といっつても良いのです。自然保護
といっつえばヨーロッパが先輩とみんな思っ
ているけれど、実は日本が大先輩。奈良時代、朝
廷は、山の木を守れ、繁茂させよとの法律を
敷いた。これが世界最古の保安林法です。下
流の水田を洪水から守り、また水田に引く水
を確保するためです。「日本の山は米が作っ
た」といっつ私の理論のゆえんですが、そんな
上流まで配慮し、さらに下流への水の量まで
気を配っている。日本のような特殊な条件下
で、水とつきあうといっつことは本来そついつ
ものなのですね。いまでも井手揚げは続い
ていますか。

(10)

現在NHK教養番組チーフディ
レクター。東条内閣秘密日記、
高松宮日記の発掘紹介や、埴谷
雄高・独白「死霊」の世界』
『三鷹事件 1949年夏に何
が起きたのか』の著者。

(11)

旧暦の八月二日のことを八朔と
いっつ。

(12)

水路の従属構造物(取水・排水
施設、橋等)を整える地区の共
同作業

宮地 今もやっていてね。八十八夜の連休をつぶしてずっとやっている。

富山 手作業ですものね。農業人口が減って若い人手が足りないということはありませんか。

宮地 それは同時に暮しの水でもあるから、地区総出ですよ。二十年前くらい、栃木県でしたが、水路のトンネルの中に入ったらガスが充滿して亡くなられた方が出たという話

もありましたね。まあ、この頃は江戸時代以来

苦心して作られた水路でも、災害復旧という名目でコンクリート化してしまって、手のかからないようになっていきますけれど、それでも形ばかりだと、蛤水道みたいな形で残っていますね。

宮地 用水路に入った水を上手に使うためには、水を思う通りコントロールしなくてはなりません。よくクリークは水路だけとお考えになる。そうではなくて、クリークというの

クリーク 水を人間の暮らしに合わせて コントロールするしくみ

いま、(有明海の)海岸堤防に立って見ると海と陸との関係がよく分かる。すぐ近くに昭和初期の堤防があり、その奥に明治の堤防が、さらにその奥に江戸時代の堤防がというふうに、堤防が幾重にも整然と伸びて、その時代時代の海岸線を示している。そして、堤防に囲まれたその干拓地は、内陸に向かうほど階段状に地面が低くなっている。江戸時代の干拓地より明治の干拓地のほうが高く、それよりも昭和の干拓地のほうが高く、それよりも泥の干潟のほうが、まだ高い。足下の堤防の内側と外側では、2メートルもの違いがある。現代の海岸堤防もまた、海の陸化を助けている。

とはいえこの風景こそは干拓地の、水のコントロールの難しさを示すものであった。干拓が先へ伸びるほど、古い土地は排水困難となる。と同時に用水源にも事欠いた。

人々は、農地のまわりの土を掘り、それを農地に盛り上げた。そのようにしてできた壕がクリークになった。クリークは雨水を引き受ける排水処理施設であり、同時にその水はかけがえのない用水源であり、水を汲み上げては、繰り返し使われた。それでも水が足りなくてアオが使われたのである。クリークはそのアオを貯め置く溜池でもあった。

当然ながらクリークは山からの川とつながり、さらに海からの潮の道、江湖と呼ばれるもう一つの水の道ともつながった。

こうして独特の水の風景が出現する。網の目状に水路を走らせ、川水と、クリークと、アオとを結んだ、一大水利システムの世界であった。

(富山和子『日本の米』より)

は、水を人間の暮らしにあわせるようにコントロールする。だから、いろいろ付属構造物と一緒にしないと、クリークにならないわけです。例えば、水門とかいろいろな施設のことですな。同じ様に、ちょっと物を見る時に、そこで暮らしている人がどんな形でこれを生かしているのか、というのを見ないと。例えば、城原川の草堰ですな。草堰の下流の人と上流の人との関係、それからそこで取った水は、Aという集落、Bという集落の水になっていきますよな。でも、ずっと用水路の下流までいくと、その水だけで足りるという保証はない。うまい具合に、あの隣に田手川っていう川があります。田手川は、城原川より筑後川の上流の方になりますから、同じ筑後川の支川でも、上流に行けば行くほど塩分の少ない水が来ます。それで田手川の城東橋のあたり(詫田江)でアオを取る。あの城東橋まで潮が上ってくるんです。そのアオの質が良い。上流になるほどね。だからそれを取って補っている。実には上からの水、下からの水、両方を上手に使いながらやっている。もっとも、筑後川本川でのアオ取水についてはトラブルはないんですが、逆に支川の上流から取っている分については、日割りだとか、時割りや、堰の構造、大きさ、材料はどのものを使うか、高さはどれくらいだとか、いろいろあります。アオについては、ちょっとらえどころのないような所がありますが、お月様を相手にすると、人間はのんびりするんですかな。

富山 それでもアオのローテーションはあるわけでしょう。

宮地 それよりも、むしろお月様相手というか、潮の満ち引きに合わせて、その時間に行つて開閉すればいい。ただし、場所によっては取水堰の付近で、マムシが出ないっていう保証はないわけだから(笑)。しかし、そういう形でいろいろ苦労していますから、お互い思いやりもあるんです。というのには、下流の方では、上流で取られると困るので、堰には水番がはりついてるんですよ。水番は眠つていないけど、ためき寝入りをしてる。それでこつこつという話がある。「酒(堰)が上がらないと水は下らない」と(笑)。

それと同じ様に、自分の田んぼの田廻りをしてるでしょう。今は蛇口ですけど、人が苦労して引いている時には、それを邪魔しないという鉄則もあるんです。ずるい人は、草履(足長)を田の畔に置いてるんです。田廻りをして水を引いている証拠になるから。近頃は草履がないから、鍬を置いてる。鍬で取水堰を開けたり閉めたりするでしょう。メソボタミアあたりに行きますと、用水路(運河)のために捕虜を使うから、捕らわれた人が川のほとりで泣いたっていつけれど、あそこでは取水堰を開けるのはシャベルです。あそこには厳格な水のローテーションがありますね。

富山 そうですね。日本とはまた違った幾何

学の世界です。

宮地 それから、水路を引くでしょう。水路に細かい取水堰などいろいろありますから、その分け具合。それから水が足りないからって隣の川のね、城原川だったら田手川からアオをポンプで揚げて、それで水の足りないところを補つていうやりかたでしょう。それもアオ取水は一ヶ所だけでなく、何ヶ所からも取る。そうすると、ある地区の農民の水勘定は、それを自分の所の関係地区の人の水奉仕だけでなく、隣の集落、例えばAだBだCだという集落まで交じり合つてやってくるんです。地区の労働つていうのは、地区単位ですが、それでありながら他の地区の恩恵にも加わっている。村全体としての経費の割り当ては、自分たちの集落だけの一人あたりの計算単位と、村外の人たちの計算の単位とは違つてね。書き方は「村外経費割り当て帖」という形になっている。その計算の中で、村自体は大きな共同体で、百姓仕事だけでなく、冠婚葬祭、慶び事、憂い事、いろいろありますね。しかもそれはいつ起こるかかわからないことですから、経費は臨時的な経費という考え方でしょう。村ではこれを「臨時費割り当て帖」とか「村外抜き物取立帖」と今でも書いてる。日照りになるか洪水になるかわからないでしょう。普通の予算という形式でなく、「全部結果として、これだけかかったから徴収します」ということになっています。そういう自分たちの暮しのための経費

はね、国から取り上げられるものとは呼び方が違つたんです。共同体でお互いに金を抜き合うから、これは「抜き銭」(貫物)って言ってます。そして、税金は国から強制的に取り上げられるから、「納め物」って言ってます。その言葉だけでも、いかに農民の世界があるかということですね。共同体が生きていなければ農民の暮しはないんですよ。

よく、村会とか議会の議員の選挙の時に、大字がいくつかの小字の単位になってますよね。今年はその字が当番だからというように、地区単位で議員の候補が出るっていう



江湖堀とダムの用水幹線(佐賀市巨勢町付近)
クレークは排水を兼ねるので、深く刻まれ低所を流れる。用水路は水源から遠い海岸地帯まで水を運ぶために高所を流れる。古代と現代の併存する佐賀平野 古代から現代に至る“水利構造物”の展示場である。

のは、そういう背景があるんです。それをただ単に古いとだけ言えるかどうかわかりません。一番悪いのは、残さなければならぬものとの区別がつかずに、バタバタと壊してしまっただけです。明治以来の日本人の悪い癖じゃないですか。つい百数十年前に始まったものが多すぎるんですよ。

結局ね、「土地と水は連続している」という思想がないとわからない。まず連続しているのは、土地がずっと横に広がっている。横の広がり縦の径です。そうすると時間と空間を含むことになる。当然、連続も無限に広



佐賀県庁展望塔より

げていくと世界中がつながるでしょう。原始の世界にもたどりつく。グローバルな視野っていうのを持たざるをえないわけです。

伝承される農村の知恵

富山 いい話ですね。平六濁水や五三年濁水で具体的に知りたいたいがまだまだあるので。皆さんがどんなふうにならざるの知恵を活用なさったか。

宮地 先祖からの知恵がありますから。濁水の時には、どこそこにポンプ置けば間違いないよ。アオが取れるという場所を知っていますよ。

富山 それは子供も受け継ぎますが。

宮地 受け継ぎますね。アオ取水だけではなく。例えば一九五三（昭和二八）年の水害の時の、諸富町の話ですがね。堤防が壊れたから、パァッと水が来ているでしょう。すると都合が良いことに筑後川は潮が引いている。「今のうちに、この堤防を打ち壊して大水を流してしまえ。そして潮が満ちる前には堤防を塞げばいい」と。

富山 そうしたカンがまだ磨かれています。すてきなことですね。

宮地 工人や職人の匠の業と同じですよ。お

日さま（おてんとさま）相手の青空株式会社社長のほこりですね。

富山 筑後川は福岡市と矢部川に水を分けている。地図を見てしみじみ思いますが、この決して大きくない体で、何と大きな荷を背負わされているのだからかと。そしてもう一つ思うのは、それでも農業が水を使っているうちはよいのですが、都市用水が増えるようだと、筑後川は気の毒な川になる。農業が水を使うことは水を作ることだからです。

ところで宮地先生は、基本的にこのあたりは水貧乏だとおっしゃっていますね。

宮地 いやね、クリークがあるのは川が頼りないからです。水貧乏とは、「やりくり上手」ということ。収入の少ない人ほど「やりくり上手」です。そこに、いろんな知恵が出てくる。乏しい水源の川をギリギリまで使う。水源を強化し探し出す。そのための舞台装置がクリーク、溜池、井戸、筑後川本流の変形利用としてのアオ取水です。これは個人の力ではできません。そこで、溜池の共同体、クリーク共同体としての村がある。だが、個々の村だけではやっていけない。用水ごと、水系ごとに村々連合がある。

富山 アオは農業用水ではあるけれど、いろいろと生活用水でも使っただけですね。

宮地 これはね、筑後川の水では、ずっと潮

が引いて、次に潮が満ちてくる前の状態の水が一番いいのです。その水は澄みきっていますよ。潮が引いたあとは、全部淡水だから生活用水についていうと、極端に言えば、こいらは干拓地で新しい土地ですから、地下水はまずいんですよ。井戸は使えない。自然の川の水の方がいい。それが潮先（しおさき）の水なんです。

潮先の水というのは、満潮がはじまって押し上げる最初の淡水の水のことです。上がったくる直前が好きだという人もいます。保存するためには大寒の時の水がいい。

この潮先の水を毎日汲む。しかし、梅雨の時には取れないから、梅雨に備えて家々では大きな水瓶を三本くらい用意している。潮先の水を汲んで、一番家の北側のくらい納戸に醤油の瓶などと一緒に置いておく。長梅雨が続いて水が使えない時はそれを使うわけです。普段は毎日汲んできたんです。毎日汲んでくる水でも、できるだけ過機にかけたほうがいい。飲料用を使う水ですから、飲料水の飯洞礫（はんづつがめ）に木炭、砂利、砂とかでる過して使う。

富山 クリークは他の地域にもありませんね。

宮地 利根川あたりにもあったんですよ。このように平野全体がクリークというのは、中国の蘇州から杭州のあたり。クリークという言葉は、中国の上海事変でできた言葉なんです。もともと溝渠と書いてクリークという。

溝渠とか溝。土地のものは、堀（ホイ）とかいう。例えば、用水ですつと水が必要な所まで引くんですよ。すると、しょっちゅう流れているから、こういうのは流れ堀というんです。それから、今度はアオをひく堀は、もともと江湖（エゴ）（注13）から出て来ているから、これは江湖堀っていうんです。干拓地の場合は、潮抜きのための水遊びというクリークもある。海岸堤防にそって横にずっと潮抜きの水遊びができてます。それから集落を取り囲むものもある。中には自分の家を建てる時に、地上げもかねて掘った溝なんていうのもあるけど、機能的に言えばいろいろあるけれど、時代的に言えばそれぞれの技術と需要に応じて、弥生初期の海が、後背湿地（ハツ

クマーシユ）を利用した様なクリークもある。ば、その後の律令時代のクリークもあるし、荘園時代のクリークもある。昨日見たような直島の、戦乱の時代の環濠集落もある。近世の大名時代になって各地まちまちの開発でなく、広く見渡した、広い範囲での水のやりとりをするようになった近世のクリーク。それから、明治以降のクリークの中では、万右衛門の踏み車が電気灌漑に代わります。それで電気灌漑に都合のいいような大正時代のクリークもある。昭和になって、二十四年に土地改良法に基づいて国営事業で作られたクリーク。今の筑後川の下流の用水事業。明治以前のクリークは、明治の田区改正でだいぶ潰されている。



かつての佐賀江、城原川とクリーク
蛇行しているのが佐賀江川。左上から右に流れているのが城原川、上流に環濠集落が見える。
写真提供：宮地米蔵氏

佐賀江川枝吉水門より周辺を見る
枝吉水門は佐賀江の洪水をカットする分水水門であるが、最大のアオ取水門でもある。

(13) 現在のクリーク地帯は、かつては干満差六メートルの有明海が河川で運ばれてきた泥を押し上げ堆積した干潟であった。その際、干潟には河川からの水が流れる溝筋ができる。満潮時には海に沈み、干潮時には河川となって水を流す。これが長い年月を経て発達し、江湖と呼ばれる川筋となった。

平六湯水

富山 平六湯水と五三年湯水の話をもつちよつとつかがえますか。平六湯水の際は佐賀県はだいが苦勞したという話は聞いていますが、「ここでも皆さん苦勞をなされたんですか。」

宮地 クリークがなければもつと苦勞したでしょう。平六湯水では、やはりアオ地帯でね、アオに頼れるからと思って上流にやりすぎた所もありますね。アオが悪すぎて、二度にわたって上流の松原ダムを開放してもらったけれど、だめだった。そういう時に、「下流に届くまでまだ我慢して下さい」というのは酷ではある。水が来るのを相当待ちかねていたからね。農民心理としてそうでしょう。日割り時刻りで自分の所に水が引けない時には、農民は素朴な生活していますから、一番のこちそうは赤飯ですが、目の前に赤飯があるのに、飢え死にしないでならないという感じですよ。「赤飯枕につれ死に」(注14)という表現がありますよ。

筑後川の河口に本川と支川に挟まれた大きな中州。これは上のほうが福岡県、下が佐賀県で、福岡県側は大野島、佐賀県側は大詫間といえます。大野島に大きなポンプがあるんですが、上流から引いた方がアオは質がいいですから。その水は幹線水路下流にある佐賀県側の大詫間島の方にね。そこに微妙な問題がありました。ここに、ほら、(筑後川



河口部の地図を示しながら)これが上のほうが大野島で福岡県、ここが旧柳川領ですね。島の中でポンプはここにあるんです。ここで公団がもってきたパイプとつないだわけです。下に届いてから取るというのは、律の雑令(ざつりょう)の中でも、水を使う場合は下から先にするっていう鉄則があるんです。用水が下に届いてから、上のほうは取るって思えばいつでも取れるわけです。ですから、たとえば水のローテーションを組む場合は、まず下流に届いてから。矢部川なんか特にそうですが、半人工的支川で福岡県のクリーク地帯に水を引いているけれど、そういう時には、八十八夜までは、全部下流のクリーク地帯に水を運搬して、そのあいだ上流の花宗川

の上の方は取らないわけです。そういう意味で下流を先にするっていうのは、それでトータルとしてのバランスが取れるわけです。逆に下に十分やっているから、原則としては八十八夜過ぎたら下流には流さない。そうは言っても適当に雨が降ってきたりするもんですが、平六の湯水の場合は、下釜・松原ダムを開放しないと、アオの水質が悪くて取れなかった。一九七八(昭和五三)年の時には、まだうまくいったけれど、平六の時には、一番下流の大詫間はだめでしたね。

富山 平六湯水の際は福岡との関係は何もなかったわけでしょう。筑後川水系の中で農民どうしの間で苦勞なされた。ところで、佐賀

(14) 佐賀地方の方言で飢え死にすることを「かつれ死に」といふ。

のもっと山側でヨスミガエがあったという話を聞きました。「もつうち」の田んぼは枯らす。我慢します。おたくは共倒れにならないように」。

宮地 蛤水道の話ですね。あそこはもともと厳格な水のローテーションがあるんです。近世に成富兵庫(注15)が蛤水道を造った時から。自分の水田が助かるか助からないか、ある程度まで日照りが進行すればわかりますから。それで、その時の割り当てで、その年の自分の耕作を放棄する。そのかわり、その後の補償措置はいろいろ考えていますよね。

補償という考え方というのは共同体ではじめてあるわけですよ。つまりその人の受ける特別の犠牲をみんなでカバーする。そういう時に、「俺はいらん」というけれども、みんな面倒をみてくれということなんです。

たとえばダムを造る、道路を造る。その金をなせ税金から補償しなくちゃならないかと言つ人は、自分たちが国全体の共同社会の構成員だという意識が低いということですよ。それが個々にちゃんと共同体があつて、はじめてそういう「今回、俺は水はいらないよ」といった耕作放棄が生まれる。すると、周りを見て見ぬふりはできないから、後のことは我々で考えさせてくれという。持ちつ持たれつという関係なんです。

富山 「水によって結ばれているんだ」という点が、水社会の一番の本質ですね。

宮地 それが地域の中に生きていて、「こういう状況になったらこれを犠牲にせざるを得ないぞ」という感覚が受け継がれるわけです。

富山 洪水や濁水の時にも、それが生きるわけですね。

宮地 そうとこの田がどうかということを、みんなは知っていますから。昭和一四年の濁水の時には、「こんなに水が足りないならどこそこの田んぼは水の集まりやすい場所だから溜池に提供した」という所もありました。

富山 ただ、それが開港の歴史とともに、ほとんど失われていっているでしょう。ここではまだかなり生きていますが。

宮地 まずね、電気灌溉って蛇口ひねれば一軒一軒流れるでしょう。あれで送水して、それに合わせて田植えをする。ところが、隣の田んぼに水が入っているのに、俺の所は水のいらぬ畑を作るとか、例えば、水田やめてハウスをやるんだというわけにいかないんです。だから、私の友人の酒屋が養焼酎を造っていますけれど、天然の養だけでは足りないので、水田に養を養殖してもらおうとするのと、まわりの田圃は養を植えているので、水を入れたら困ると言われた。そういうことがあつて、自然に耕作の手段が自ずから縛られるってこういうこともある。いろんな形で共同体というのは……。

富山 近代化されていくと、どんどん崩れていく。

宮地 今まで農水省は汎用農地と言っているでしょう。つまり何にでも使える、水田でも畑でもどちらにも使える農地。ところが、ハウスというのも年中水がいらぬかというところ、ある程度の水は必要です。しかも必要な時は四六時中でしょう。それから、国営の幹線水路をはじめ、県の水路の水位を、今のこの時期で下げられない。いい水質を保つためには、溜池でも年に一度は乾かさなくてはいけませんし、水路にしても、時々乾かして、根っこから浚えないといけない。水路や溜池の底を空気に触れさせないと、水質が保てない。そういう維持管理の問題がいろいろあるわけです。さらに灌溉に使う電気は、地区ごとの計算で電気代いくらだったかとか考えましょう。どこまでいっても農業ってというのは、そういう共同体のつながりがまとわりついてくるわけです。

農業に関わらず、どこの世界でも複雑な複合文化から成り立っているわけです。ですからこのクリーク地帯の特徴はね、みんなが村の役割をずっと順番にやっていますよね。固定的にある特定の家があるということではなくて、平均化され平等化されている。庄屋、区長、みんな廻り持ち。世襲ではない。これがクリークの特徴なわけです。



(15) 成富兵庫茂安 一五六〇〜一六三四(永禄三)寛永一。龍造寺隆信、鍋島直茂・勝重に仕えた武将。蛤水道をはじめ、藩内の河川改修、ため池築造など治水事業に大きな功績を挙げたことで知られている。

アオの文化博物館を

対談を終えて

富山和子



城原川の草堰

筑後川は私の大好きな川です。日本中の川を歩いて来た私ですが、これほど思い入れを込め、丹念に、繰り返し繰り返し書いてきた川も他にありません。日本の川というものをこの川に代表させて書いたのが『水の文化史』でした。その後も部分的にですが、『日本再発見 水の旅』に、また『日本の米』のお米は生きている^(注16)に。

筑後川は収斂する川です。利根川のように、下流は広がってどこかへいってしまえば、とらえどころのない川とは違います。この川で使った水は必ずこの川に戻り、そういう分かりやすい川なのです。ですから、いま行われているように、水系を越えて福岡市にまで水をあげるといふことは、川の本分を越えさせた、実は異常で大変なことなのです。川の個性を壊してしまう大手術、といっても良い。福岡市民は、どこまでその認識を持っているか。その収斂する川の中で、筑後川の人たちは、上流も中流も下流も、よってたかって水を作ってきた。筑後川が魅力的な理由がそこにある。

ります。上流が森林を作り、水を作る。中流がその水を水田に引いて、水田はダムですから、また水を作る。そして下流ではその水が海へ行ってしまうと、それをまた引き上げて陸地に止める。これがアオでした。

土についても同じです。よってたかって土づくりをしている。上流の森林が土を作る。洪水がそれを海へ運ぶ。それを海が陸地に返してくれる。それをキャッチして陸地に止めていく。これが干拓でした。上流が土を作る。下流がそれを受け止めるという、これまでの日本列島の国土作りの図式の、その典型的な姿をしているのが筑後川だったのです。

いま、上流では林業が衰退して、森林が歴史始まって以来の危機に直面しています。農業も危うく、加えてアオの文化がなくなろうとしています。心細い限りです。せめてアオ取水の技術くらいは、映像や活字ではなく模型などを使って、可能な限り文化遺産として残すことが出来ないか。アオの文化博物館を提案して、終わりたいと思います。



(16) 富山和子『お米は生きている』講談社 1995年

編集後記

「水にかかわる生活意識調査」。たった五年間の定点観測でも、様々な変わりようを見つけたことができました。現代の都市生活者が水に求めているもの、水に思いを込めているもの、安全な水への渴望、水を守るために必要な行動意識……。まさに、都市の暮らしにも、いろいろな水とのつきあい方があるものです。

日本最後の清流と言われる四万十川。生活雑排水を、木炭や石を組み合わせた浄化槽を通してきれいにする下水方式として「四万十川方式」が有名です。今回は、詳しく御紹介できませんでしたが、今後全国のこうした活動もしっかりと調査していきたいと考えています。

ミツカン水の文化センター機関誌

「水の文化」第3号

発行日 1999（平成11）年10月

発行 ミツカン水の文化センター

〒475 8585 愛知県半田市中村町2 6

株式会社ミツカングループ本社広報室内

電話 0569(24)5087

〈お問い合わせ・ホームページアドレス〉

ミツカン水の文化センター 東京事務局

〒143 0016 東京都大田区大森北 2 2 10・4F

電話 03(5762)0244

<http://www.mizu.gr.jp/>

複写転載断無禁

ミツカン水の文化センター